

「学校図書館から始めるアクティブ・ラーニング」～ 知的好奇心と「生きる力」を育てるために～

講師 中央大学職員 梅澤 貴典 氏



—— 午前の部 講義 ——

皆さん、おはようございます。私は中央大学の職員です。教務も入試も含めさまざまな担当を経験しますが、その中で理工学の図書館で7年間、情報リテラシー教育やデータベース等の担当をしていました。

これから中高生が社会に出るにあたって「高校入試、やだなあ」「大学入試も、やだなあ」「就活は、もっとやだなあ」と、「やだなあ、やだなあ」という気持ちが3、4年に1回来る人生は、つまらないじゃないですか。もっとワクワクして欲しい。「社会に出た時に、自分は何をやるか」「世の中って、どうなっているんだろう」と考えるために、図書館がもっと支援ができるのではないかと、という話を今日はしたいと思います。

今日は、次のような順番で4つ話をしようと思っております。まず自己紹介に加え、イントロダクションとして世界の図書館事情を紹介したいと思います。次に、今の子どもから学生、市民の方が世の中に出て、「自分はどう生きるか、何ができるのか?」という「生きる力」を得るため、どんな学びがあるのか。その力をいかにして育てるか、そのために図書館は何ができるかという話。

3番目に、これが午前一番大きな柱となるのですが、「アカデミック・スキルズ」の模擬授業です。私は都留文科大学で非常勤講師として集中講義を毎年やっています。通常半年間で15回、90分×15回で2単位を得る授業を、3日に集中して、朝の9時から夜の6時まで5コマ×3日間ぶち抜きでやります。「学び方」、「まとめ方」、「発信の仕方」が三本の柱です。つまり、大学に入ってレポートを書いたり、人に何かを伝える前に、調べて、考えて、

それから人前で話す。あるいは文章にする。そういう大学生として基礎的な学び方を教えるという授業です。今日の午前中は、その15コマ(22時間半)3日間の授業を約2時間に圧縮してお届けします。高校生が入試という壁を乗り越えて次のステージ、大学に行った時に「何がわかっている、何がわかっていないのか」、「どんなことで困ったり、つまづくのか」。そういったことに思いを馳せて頂くことによって、その前後の世代、未就学の小学生、あるいは社会人、働き終わってリタイアした世代を含めて、図書館とその職員だからできる支援の可能性を一緒に考えましょう。

4番目としてカナダの大学図書館における教育支援に触れたいのですが、もしも模擬授業に興味をもって聞いていただくとこちらも熱が入るため、おそらく時間切れでカナダの話はできなくなります。でも、こういう時代なので、実は便利なことに「続きはWebで!」という手段があります。都留文科大学で2コマ3時間を使って私が今まで見てきた世界中の図書館について話した講演の動画がWebでご覧いただけます。

1. 自己紹介とイントロダクション

まず自己紹介とイントロダクションです。さっき世界中の図書館といいましたが、実は高校生の時から、リュックを背負って世界を旅するのが好きでした。生まれて初めて自分でチケットを手配して自力で行ったのが、16歳の夏休みです。ロンドンから鉄道でイギリスを一周するという旅をしました。

1990年当時なのでネットもありませんし、使えるのは国際電話、エアメールとFAXの3つだけです。それで苦労しながらユースホステルという、若者向けの宿を取りました。2,000円ぐらいで、広いところに二段ベッドがいっぱいあって、世界中の色々なバックパッカーが集まるんです。

大人になって色々なところを旅しましたが、本日お見せしたいのが、エジプトのアレクサンドリア図書館です。図書館司書課程の授業を取った方は、最初の方に聞いたことがあるかもしれません。

今から2300年ほど前、アレキサンダー大王とともにアリストテレスを家庭教師として育てたプトレマイオスが三世代にわたって統治していた港街です。

ヨーロッパや中東などから船が来るので、プトレマイオス王は「あの船に乗せられた書物には、自分の知らない知識が書かれている。そんな膨大な知識を一つにまとめておけば、そこに行けばなんでもわかる場が作れるのではないか」と考えました。これが世界最古の図書館の一つと呼ばれる、アレクサンドリア図書館のはじまりです。

世の中なかなか諸行無常で、この図書館、戦火で焼け落ちてしまいました。2000年に入ってユネスコとエジプト政府が、「そんな図書館があったのだから、ここにもう一度世界一の図書館を作ろう」と建て直したのが、今の新アレクサンドリア図書館です。半円形の壁に漢字、ヒエログリフ、ハングルなど世界中の文字が刻まれた、非常に壮大な図書館となっています。

今のエピソードから見えてくることは、やっぱり人は権力を持つと、世界中の知を独占したくなるんですね。「俺が知らないことはけしからん」、「ここに来れば何でもわかるようにしていきたい」と考えるのです。これは現在の何かに似ていませんか？たとえば Google Books というものがありますが、Google はハーバード大学やオックスフォード大学など世界の名だたる図書館と提携し、世界中の書物を電子化するというプロジェクトを進めています。今のところどれほど知の発展に貢献できるかは未知数ですが、2000年経っても結構、人間ってやること変わらないのかなと思います。

<Harvard 大学と図書館>

次のスライド。これはハーバード大学の図書館です。ここで皆さんご質問です。ハーバード大学に何個の図書館があるかご存知ですか。現在は約 80 館あります。嘘だと思った方は、ハーバード大学の公式サイトで確認してみてください²。

法学、経済学、音楽、地図の図書館、日本・中国・南北朝鮮の研究をする人のための東アジア図書館などがあり、たとえば日本文学や日本史学で修士号や博士号を取った人が、もう一回大学院に行って図書館情報学の修士を取らないと、東アジア図書館のライブラリアン（司書）にはなれません。同じように法学の図書館なら、まずロースクールに行く。一緒に学んだ同期生は弁護士や検事・判事になったりするのですが、さらにもう一度、図書館情報学の大学院で修士を取らないと法学のライブラリアンにはなれません。

そのため、レポートや卒業論文、博士論文を書く上で図書館に相談すれば、「その分野がわかる」プラス「図書館情報学の学位を持っている」というダ

ブルマスターが相談に乗ってくれます。これがアメリカと日本の違いで、結構度肝を抜かれました。

ここに神殿みたいな写真がありますが、これはハーバード大学の中で最も大きいハリー・ワイドナー記念図書館です。

ここでまたミニクイズです。もしも私が勤める中央大学の蔵書を 1 日一冊、1 年間に 365 冊読んだとすると何年かかるとおもいますか。5 年、50 年、500 年、5,000 年の 4 択です。

正解は、4 番の 5,000 年。中央大学の蔵書は 230 万冊あるので、単純に 365 で割ると 6,000 年かかります。寿命が 6,000 年あるとして、6,000 年目に全部読み終わるかと思ったら、さらに毎年数万冊ずつ入ってくるので絶対に追いつかないですね。ところが、ハーバードは 5 万年かかります。2,000 万冊の蔵書があるので、中央大学も日本では指折りの大きい図書館がありますが、ひと桁違うんですね。

そのうち 600 万冊を収蔵しているのが、このハリー・ワイドナー記念図書館です。なぜこの名前なのかというと、図書館を建てた人の寄付です。ハリー・ワイドナー君はハーバード大学を卒業してわずか 5 年でタイタニック号に乗り、命を落としてしまいます。そこで家族が彼の生きた痕跡、証を残したいと願って彼の名前を冠した図書館を建てるべく大きな寄付をしました。この図書館の真ん中にはレッドカーペットみたいな立派な階段があり、その先に美しい閲覧室があるのですが、そこはハリー・ワイドナー君の専用閲覧室であり、中には入れません。

左上の銅像はジョン・ハーバードさんの像です。よく設立者と勘違いされるのですが、ハーバード大学はみんなで作った大学なので「唯一の設立者」はいません。初期、みんなで創った時に「たくさん寄付してくれたハーバードさんの名前をつけよう」、後に「銅像を建てようかな」と思った人がいたのですが、この像には色々な嘘が隠されていると言われています。まず台座に刻まれた設立年が違う。顔がハーバードさんをモデルにしていない。金ピカの左足は「撫でると学業成就する」って言われていて私もしてきたんですけど、今のところ特に何のご利益もなかった。「自力でやらなくちゃいけないんだ」ってことですね。

左下の写真に「人間をダメにするソファ」みたいなものがありますが、これはハーバード大学のロースクール（法学）図書館の渡り廊下に置かれたクッションです。向こうの人は深夜まで勉強をして一旦ぶっ倒れて眠り、また起き上がって頑張るぞという感じです。図書館も試験前になると 24 時間開館になったりします。

アメリカは、一つの単位を取るのものすごく苦勞します。日本の大学は、入った以上出られる前提があるように見えますけど、アメリカはめちゃくちゃ厳しくて膨大な宿題が出て、厳しい試験が与えられます。そのために図書館がものすごく頼られているし、図書館も職員の専門性からして、答えられる準備をしています。

<愛される図書館であるために(アメリカの例)>

次に私が行ったイリノイ大学の話で、9月から11月の2ヶ月間、さっきの紹介のとおり学ぶ機会を得ました。9月というのは日本でいう4月で、入学シーズンです。

「ネットがあるのに、図書館なんて足しげく通うところじゃないよな」と思っている新入生に「そうじゃないんですよ」というところを見せるため、まずは館内を巡るスタンプラリーが催されます。地図を片手に謎を解きながらまわっていくと、「ここが相談コーナー」「ここがデータベース検索コーナー」というように図書館の機能がわかるようになっていて、ぐるっとまわることによって、「図書館ってこういう機能があるんだな」、「そうか。困った時には、ここに来れば解決策を得られそうだな」と知らず知らず学べるように、上手に持っていきます。

スタンプラリーの途中にはチェックポイントがあって、DDC (NDC: 日本十進分類法の原型) のキーワードでビンゴして、一列揃ったら文房具がもらえたり、ハロウィンが近かったので魔女の格好をしたライブラリアンが水晶玉を置いて「あなたの学びの行く末を占うコーナー」などもあり、私もやってもらいました。

これは和装本のコーナーです。何をやっているかという、「自分で本を手作りしてみましよう」、「好きな和紙を選んでね」、「本を縫って作ってみよう」、「本ってこういうふうにできているんだね」、「愛おいしいね」、「汚しちゃだめだよ」と、体験を通じて学べます。向こうも本のダメージには悩んでいて、アメリカ人なので、きっとコーラを飲んで、チェリーパイでも食べながら本を読んだりするんでしょうね。

てっきり私は「はい、汚したから罰金」とか「貸出停止」とかそういうルールで縛って予防するのかなと思っていたので、意外とこういう情緒的なことをやっていて、「これ本当にアメリカの事例なの?」とびっくりしました。私の中のアメリカ人像がバラバラと崩れていった瞬間です。

この下側の写真には「ライブラリアン・アクション・フィギュア」と書いてあります。お巡りさんと

か消防士とか兵隊とかありますけど、向こうはライブラリアン、図書館職員がこういったおもちゃになっています。よく見ると「アメイジング・プッシュ&アクション」と書いてあって、この眼鏡の女性の背中の赤いボタンを押すと、口に人差し指をあてて「シー! 静かに!」とやってくれる。「世界共通で、図書館職員ってこういうお堅いイメージなのかなあ」と思ったら、実はナンシー・パールさんという実在の伝説のライブラリアンの姿形をモデルにしているそうで、これはニューヨークのパブリックライブラリーのスーベニアショップで買いました。向こうの図書館は結構博物館みたいにショップがあり、そのぐらい図書館が社会生活、学生生活の中心として、親しまれているんですね。

<寄付で根付いたアメリカの図書館文化>

アメリカにおいて成功した人は、次世代の人に対して寄付をするという文化があります。マイクロソフトの元会長・ビル・ゲイツさんが今何をやっているかという、「ビル&メリンダ・ゲイツ財団」を奥さんと一緒に作って、世界中に巨額の寄付をしまくっています。

図書館に寄付する大富豪は、ビル・ゲイツさんが初めてではありません。かつてアメリカにはほとんど図書館なんてありませんでした。開拓時代の貧乏人は一生貧乏で、お金持ちになるのは夢のまた夢だった。ところが、アンドリュー・カーネギーさんという貧乏な少年が、本から知識を得ることによって学び、やがて鉄鋼業でチャンスを掴み、大富豪になります。自分のように「貧しいからチャンスがない」という境遇の人が、次の世代もずっとそのままじゃどうしようもないだろうと、北米に2千もの図書館をつくりました。それが、カーネギー・ライブラリーという今のアメリカの公共図書館の礎になっています。

同じように、スタンフォード大学は、「西に行けば砂金が取れるぞ」というアメリカのゴールドラッシュの時代に、「みんなと同じようにスコップとバケツを持って殺到したんじゃ、先に行った奴に負ける」と考え、全く別の発想をして「人が移動するための鉄道」を敷いて大金持ちになったリーランド・スタンフォードさんが、さっきのワイドナー家と同じように一人息子を亡くしてしまうんですね。そこで、「カリフォルニアの若者達だって、自分の子供みたいなもんだ。未来の教育に投資しよう」とつくったのが、スタンフォード大学です。

そういう精神が根づいているのが、アメリカです。「日本にもそういう粋な文化があればいいのにな」

と、羨ましがってばかりはいられません。実は、アメリカだって寄付に対してはものすごくシビアなんです。ビル・ゲイツさんの財団も、黙っていればお金をくれるような構造ではありません。たとえばチリの図書館が「うちの図書館にはコンピューターが不足しています。ここにもし20台のコンピューターが配置されれば、これだけの効果が得られるはずです」ということを申請するんです。支援の必要性和効果を説明して相手を納得させ、やっとお金が下りてくるかこないかという戦いの世界なんです。

アメリカの大学図書館のライブラリアンは、こういう財団からお金を獲得するのも仕事のうちでして、イリノイ大学は州立の大学で、その図書館ですけども、州からの交付金は2割しかありません。あとは学費と、寄付金を自らが取ってくるという資金獲得（ファンド・レイジング）に支えられています。

<あるべき図書館の姿とは>

世界の図書館シリーズの最後ですが、これはスウェーデンにあるウプサラ大学にある図書館です。他者の視線が気にならないようにコの字型になった大きい背もたれのあるソファがあって、カフェみたいに見えますが、よく見ると後ろの方はぐるっと本棚なんです。非常にゆとりのある空間設計がされている。天井の高さとか居心地を守るには、「この図書館はこうあるべきだから、こういうふうになろう」と最初のコンセプト決めた後、そのポリシーを揺るがさないということがすごく大事だと思います。

もしも日本の大学図書館で、幸運にも寄付などでこんな素敵な図書館が建てられたとしますよね。しかし、私には5年後10年後どうなっていくかがありありと目に浮かぶんです。というのは、日本の大学図書館の評価基準が、床面積、座席数、蔵書数、貸出数などであり、何十年も前からほとんど変わっていません。そうすると「蔵書数が足りてないな。よし、このソファ間の空きスペースに本棚を5つ置こう」「天井が高いな。よし、じゃあここを二層構造にして、集密本棚を置けるな」という話になって、どんどん窮屈で醜い図書館になっていくでしょう。確かに、蔵書数は大事ですけど、「どういう図書館を目指し、そこでどういう時間を過ごしてほしいのか」、「図書館から帰るとき、学生には何を心得てほしいのか」という根幹のポリシーだけは、決してブレていっちゃいけないと思います。

<図書館・図書館情報学との出会い>

私は高校を出て、青山学院大学二部文学部英文文学科というところに行きました。二部というのは、

今、青学にはないんですけども、昼間に働いている人のための大学です。夜の6時から1限が始まって、2コマ4年間で卒業する。「2コマで4年間って、楽でいいんじゃないか？」と思うかもしれませんが、4年間で124単位とらなくちゃいけないのは普通の大学と同じで、高校の定時制みたいに1年長いみたいなことはないので、1科目も落とせませんでした。

リュックを背負って世界中を旅していたので、「英語力で入れる学部はないかな」と探して入学し、「夜に青学で学ぶんだったら、昼間青学で働きませんか」というビラの図書館の文字に「キラッ!」とくるものを感じて働きはじめたのですが、ここが地獄の日々の始まりでした。朝の9時から5時まで図書館でひたすらデータ入力をやって、夜の6時から英文科でシェイクスピアとかをやるんですよ。その中で楽しかったことがあるとすれば、土曜日のカウンター当番の時でした。

1年生のときは、質問がくるとすぐ専任職員にバトンタッチしていました。けれど「これは探し方が悪いんですね。こうやると探せますよ。」という利用者とのやりとりを何回も見ているうちにだんだん資料の探し方に関する知識が少しずつ身につきました。それに、普段やっている仕事が入力なので、書誌の構造だけは嫌というほどわかっているんですね。「この論文を探しているんだけど、蔵書検索システムでヒットしない。この大学の図書館、大したことないね。」という誤解には、よく出会いました。当時でいうと「雑誌記事索引」を紹介すると、結構年上の院生さんや教員が「もっと教えて!」「こういう時どうすんの?」と質問してくれるんです。それが嬉しくて「こっちが学べば学ぶほど感謝されるこの仕事は面白いな!」と思って、大正大学の講習にひと夏(44日間)通って図書館司書の資格を取りました。その後、中央大学に就職して図書館で新入生向けのガイダンスをやったり、理工学部だけで約100人の専任教員がいて100の研究室があるので、流体力学やら、量子力学やらの研究室ごと専門分野に合わせたオーダーメイド型の講習をはじめて企画実施していました。

その頃に、難しい局面がありました。ちょうど2000年代は電子図書館化の時代でした。たとえば、『Science』とか『Nature』などの雑誌の最新号が、発刊したその瞬間に世界中からオンラインで読めるようになりました。ただし、読めるのはお金を払った人だけ。理工学分野では世界の学術情報は最新のものが必要なため、大学図書館はお金を払って、紙の雑誌契約をどんどん切って、電子雑誌にシフトしました。学生・院生さんや教員は、IDパスワード認

証により出張先がロンドンでも「Science」の最新号やバックナンバーも読めるし、キーワード一発で100年分を検索できる。ネットカフェでもスマホでも読めるようになり、すごく感謝されました。「図書館がどんどん進化していますね」、「これで研究が進みます。ありがとうございます」と。けれど、先ほど言ったように現在の大学図書館の評価基準はピントと時代感覚がずれており、私が頑張れば頑張るほど来館者数・貸出数・蔵書数が当然ガタ落ちになります。あれほど頑張って研究と教育発展のために信じて進めた図書館の電子化が、学術への貢献度が上がっているにも関わらず、国による評価の規準では逆に下がっていた。これは中央大に限らず全国的な現象で、もちろん評価が下がれば人やお金が切られるんですね。「これはおかしい」と憤慨していた時に私立大学図書館協会の派遣によりイリノイ大学で2か月学ばせていただく機会があって先ほどのアメリカの大学図書館による支援を目の当たりにし、目から鱗が5、6枚落ちて、自分も司書の図書館学の修士を取るべきだと思いました。慶應とか筑波の大学院ならば働きながら行けますので、まずそれを考えたんですね。

大学院の入学試験には「研究計画書」が必要です。「自分のやりたいテーマについて、今までこれだけの人がこれだけのことを考えてきた」ということを徹底的に調べるんですね。これを「先行研究調査」と言います。日頃、自分が理工の学生に向けて「こうやるんだよ」と「技術」として教えたことを、初めて「自分ごと」としてやってみた。そしたら、たくさん論文がヒットしました。過去にアメリカと日本の違いに気づいていた人は山ほどいて、論文もたくさん書かれていました。「それなのに状況が全然改善されないのはなぜだろう?」とよく見てみると、論文が載っている雑誌は『大学図書館研究』『現代の図書館』『図書館雑誌』…など、図書館の人たちだけが読むものばかりでした。これでは、学長や理事長や、県議会や知事など、意思決定者の耳には主張が届かないと考えました。そうした時に、東京大学の大学院に「大学経営・政策コース」つまりお財布を握っている経営者の考え方を学ぶ学問の分野ができたので、そこで2年間働きながら学んで、教育学修士の学位を取りました。その後、東京農業大学大や都留文科大学などで授業をやっています。

東農大では、アフガニスタンやマラウィなどから2年間JICAの支援で農学の修士号を取りに来る人たちに、先行研究調査の方法を教えています。「Web of Science」など世界中の論文を探すデータベースを使って、「自分のやりたい分野で、世界中の人たちは

今まで何を考え残してきたんだろう」と徹底的に探すという実践演習を、英語だけでやる授業です。初めての挑戦だったので、私自身もずいぶん鍛えられました。

都留文科大学は教員育成に定評のある大学で、新入生向けに「学び方そのもの」を教える「アカデミック・スキルズ」という科目と、司書課程の必修科目の「図書館情報技術論」という科目を担当しています。今日の午前中は「アカデミック・スキルズ」について、まず、「大学生としての学び方を私が教えるなら、どう教えるか」という模擬授業を体験してもらいます。午後は、「図書館情報技術論」で実際にやっている、利用者ガイダンスの企画・デザイン・実演を体験してもらいます。

2. 「生きる力」を育てるために

<高大接続改革と図書館>

まず、今私は高大接続の仕事に携わっていますが、「生きる力」を文部科学省が提言したのは、20年以上も前に遡ります。「自分で課題を見つけ、自ら学び考え、主体的に判断行動し、よりよく問題を解決する力」、「自分だけではなく、他の人とも協力してやっていくための力」とも定義され、テーマはすばらしくて私も共感するのですが、「ゆとり教育」政策においては方法が現場任せで上手くいきませんでした。でも、今の文部科学省は本気で「生きる力を育てたい」と考えているようで、これが今の高大接続改革にもつながっています。従来の「知識伝達型」の教育から「問題解決型」の学習に転換を模索している最中であり、この課題を情報の力と活用法の教育でサポートできれば、図書館の役割はますます重要になっていくはずですよ。

<はじまった図書館入試>

具体例を挙げると、2016年度、お茶の水女子大学が「新フンボルト入試」を始めました³。今までの「小論文」は机に座って「トランプ政権で何が変わったか」などの課題について、自分の知識だけを頼りに書くやり方でした。しかしこの入試は大学の図書館を舞台に、そこにある資料やデータベースを使い、与えられた課題について証拠に基づいて、長時間をかけて自分の論理を展開して発信するというものでした。

この入試を行うにあたり、最大の難関はネットワーク使用可否の判断でした⁴。2011年に京都大学の入学試験で、スマホで英文を「Yahoo!知恵袋」にアップして和訳を依頼するという事件があったこともあり、「オンラインで誰かと繋がれるかもしれない

資料を使わせていいのか？」という問題は最後まで議論されたのですが、「使ったパソコンのログを取って、ネット掲示板など双方向のツールを使っているかを後で確認すればよい」という判断をしました。「ネットの情報源は使っちゃだめだよ」という入試にしたら、今からの社会を生きていくための能力を測る入試にならないでしょうし、たぶん全然志願者をワクワクさせられないでしょうから、これは大英断だと言えます。

文系は附属図書館を舞台に「図書館入試」ですが、理系は「実験室入試」で、これも面白いのでHPを見てみてください。このような、知識だけに偏重しない課題解決型の入試は、これから大いに広がっていくと思います。

<問題を解決する力を身につけるためには>

大学に入ってきた人達にレポートを書かせる際によく言われるのが「レポートや論文なんて、大学で単位を取るためのもので、実社会では書きませんよね？」という質問です。確かに、レポートって面倒臭いですよ。しかし、課せられたテーマをWeb検索して、適当に出てきた情報を切り貼りして、何とか勘弁してもらってギリギリ単位が取れたとしても、4年間それを繰り返したその先に就職活動に挑戦することを想像してみると、全く実力につながることが分かりやすいと思います。ものすごく行きたい会社の面接で、これまで通りネットで集めた情報で「御社の企業理念は…」と話すと、「いや。その企業理念はこっちが作ったのだから、知ってるよ」と言われてしまいます。でも、たとえば「ライバルの会社は何をやっているか」、「まだ進出していないアジアや南米でどういう商品が不足しているか」などの多角的な情報について、自身の学んだ分野に絡めて話したら、こんなに強いことはありません。1～2年次の一般教養では、それほど興味のない、たとえば通商史や宗教史というテーマでレポートが課せられたとしても、さまざまな分野を幅広く知っているのと知らないのとでは、4年後の自分、さらに就活を乗り越えた後の自分の活躍の幅の広がり違います。

企業で「大きなプロジェクトを動かしたい」と思ったら、確かな情報に基づいた実現性のある「企画書」が必要です。これは文章だけでなく、社長や取引先に向けて言葉で提案する場（プレゼンテーション）も同じです。どんな目標であれ、実現のためには周囲の人に信頼されることが大切で、高校生だとか大学生だからじゃなくって、40歳50歳になった時も、「これを我が社でやることで利益も生まれ、

社会に大きく貢献ができる」と思った時に、相手を説得できるだけの「確かな情報によって、問題を解決する力」をつけましょうというのが、図書館での学びに向かう第一歩となります。

<学びの幅を広げるために>

では「生きる力」の締めくくりです。皆さんは学校図書館、しかも高校で働いていらっしゃるの、調べ学習や課題研究や科目と連動したレクチャーなどいろんな取組みをなさっていると思います。でも、なぜか大学に入った後はブツツと切れて、「大学生としてのレポートの書き方」「社会に出るための準備」のように世代ごとにあまり連続性のない別々な取組みをやっていると感じています。これが連携すれば、図書館の支援に強みが増してくるかもしれない。たとえば、学校図書館で「この地域をいかに活性化するか」という課題に取り組んだ時に、学校図書館の蔵書数だけでは限りがあるので、地域資料や、広く社会に通じる情報となると、地域の公共や大学の図書館と連携すれば、もっと視野が広がるはずですよ。

この間、広島県の県立図書館に呼ばれて話をしたときに、一般の人は入れないバックヤードも見せていただきました。戦前の空襲や原爆を免れた広島版の新聞が取ってあったり、面白いところではタウン情報誌『ホットペッパー』広島版のバックナンバーが並んでいました。たとえば「駅前のシャッター商店街を復活させる」といった課題の場合、「かつて広島では何が流行って、逆に何がウケなかったのか」を、Googleで検索したって国会図書館に調べに行ったら、広島の地元の図書館に敵うところはありません。ましてや『ホットペッパー』は無料で流通しているので、国会図書館に納本する義務はないため、国でさえ持っていない情報を地域で持っていたりする。こういうところと連携することによって、学びの幅が広がっていくはずですよ。

3. 図書館活用・情報リテラシー教育の実践事例

<授業目的と概要>

さあ、次に午前の最後の柱、アカデミック・スキルズについてです。この授業は、学習の基礎を学ぶ目的です。その前に皆さん、まずは受講者として大学1年生の気分になってください。ここには経済も文も法も理工学部の人もいるけど、この授業では共通に必要な、大学生として「調べる」「まとめる」「発表する」という三本の柱で授業をやりたいと思います。3日間ありますが、今日は1つ目の「調べる」に特化し、「信頼できる情報を集め

る方法」を学びます。2・3日目は、「自分が見つけた問題を分析して、考えを付加し、最後に発表してみる」ということにチャレンジしてもらいます。

もともと理工学の大学院生に向けてデザインした授業を、社会人大学院生から小学生までさまざまな対象に向けて話しているのですが、今日は「大学1年生バージョン」です。授業の内容としては、まず学び方の中で図書館の利用の仕方、データベースの検索方法に加えて、ノートの取り方。次に、集めたデータや文献などを論理的かつ批判的に読む力。常に頭の片隅に「本当かな?」とか、「これって何か足りないんじゃないかな?」と疑いの目を持ちながら文献を読み解く力ですね。3つ目がレポートの書き方。レポートは日記でも手紙でもないの、書き方というものがあります。4番目はその集めた情報を活用するためのルールや情報倫理を含むリテラシー。5番目は、どうやって発表するか。最後、6番目に、研究者としてやっていいこととやっちゃいけないことを学んで、きちんとした研究レポートを書く方法を学びます。

<アカデミック・スキルズの意義>

これは去年この授業で学んだ皆さんの先輩達に、初日に取ったアンケートです。大学の新生が、まっさらな状態の時に、「入学前に、どんなツールを知っていたか」というアンケートです。たとえば最初の「OPACの検索方法」ですが…。すみません、「OPAC」は初耳かも知れませんよね。これはOn line Public Access Catalogの略です。「ネット上にある」「誰でも到達できる」「カタログ」。要約すると、「こんな本があるよ」というリストのことです。図書館の人は、ついつい専門用語を使いたがるんですよ。「そこの本棚に行ってください」と言えばわかるのに、「そこの書架に行ってください」と言ってしまう。これでは「書架ってどこですか?」という話になってしまいますね。

さて、そのOPACを「使っていますか?」と聞くと、2割以下の先輩が「よく使う」、3割が「たまに」。2割が「知っていた」。3割が「全く知らなかった」という分布になっています。全く知らなかった人も、Amazonなどは使っていたと思うのですが、おそらく「何かわからなかった時に図書館に行こう」という発想自体がなかったんじゃないかなと思います。ほとんど「全く使わない」で真っ白の人もいました。これは無理もなく、高校生で、「今ある法律を調べるために、政府の法令データベース『e-gov』を見よう」という人はほとんどいないと思います。大学生になれば、法律を調べる時、ひょっとして本屋さ

んや図書館に行って六法全書を見ればわかると思っているかもしれませんが、しかし、今国会で決まったばかりのホヤホヤの法律は載っていません。六法全書は出版された後に更新されないの、今この瞬間に生きている法律が全て載っているとは限らないのです。逆にいうと、既になくなった法律も載っているわけです。そういう時に、現行法令がWebで閲覧できる『e-gov』を知っているのと知らないのでは、情報が見つかる可能性の幅が違ってきます。なので、この授業は「図書館の使い方を学ぶ」だけじゃなくて、「信頼できる情報であれば、インターネットの情報もガンガン使っていこう」、「それらを組み合わせて、用途に応じて知識をどこから持ってくるかを学ぼう」という方法を学び、身につけていただきます。

<インターネットの情報とは>

まず、最初に皆さんにお尋ねします。インターネットが急速に発達しましたが、「どんな情報でも、いつでも、誰でも、どこでも、無料で手に入るようになった」という文章の中で間違っている点を探し、近くの人と1分間話し合っ、なるべく多く見つけてください。見つかった人は具体的な「たとえば」という例を挙げて説明をしてください。何か見つかったという人、手を挙げてください。

それでは、まず校長先生達にインタビューをしてみましよう。(校長:)「どんな情報でもと言ってますが、ネットに載っている情報なんて限られているものだけなんじゃないかと思つづく思っているんです。発信している人の立場とか、その人の知識によって左右されますよね」。

そうです。パーフェクトです。発信する人の立場によって左右されるんです。最近トランプ大統領が就任しましたよね。トランプさんが選挙に勝った要因として、「情報の流れに味方された」という点が挙げられます。たとえば「ローマ法王がトランプ氏を支持した」というデマが流れ、逆にヒラリー氏側に関する根拠のない中傷が拡散され続けました。

「いつでもどこでも誰でも」も違います。たとえば、私がキリマンジャロに登った時に、「今からキリマンジャロに登ってきます」とFacebookに書き込みをして、その後、5日音信不通になりました。LINEも既読にならなくて、私の周りがざわついて「あいつ遭難したんじゃないか」という話になって、5日後に降りてきたら、えらい反応がありました。標高5,000mにはwi-fiなんて飛んでないんですよ。当たり前です。地球上でインターネットが使えない場所は多いです。

そして、たとえば中国ではGoogleもFacebookも使えません。Twitterの代わりに、中国版Twitter「微博(weibo)」を使わなければいけない。国によっては、アクセスできるサイトが制限されているのです。

「無料で」というのも大間違いで、たとえば日経新聞の電子版を電車で読んでいる人は、月々の会費を払っています。新聞社は、会費収入があるからこそ記者を雇って責任ある記事が書け、会社の看板を背負って発信している。お金を払った人だけが、付加価値のある情報に自由にアクセスできるわけです。Googleはとても便利なツールですが、見に行ける範囲は限られていて、たとえば日経電子版の全文記事は有料エリアなので、サーチボット(自動的に情報を集めるプログラム)は探しにいきません。

つまり、この「どんな情報でも、いつでも、誰でも、どこでも、無料で手に入るようになった」という文章は、全部間違いです。ただ、普段の会話の中で先ほどの文を問いかげられたら、普通に「そうだよね」と答える時代じゃないですか。今日は皆さんに、インターネットで無料で手に入る情報というのはどんなものなのか。その恐ろしさを説明したいと思います。

皆さんの中に『千と千尋の神隠し』という映画を見たという人はどのくらいいますか。実は私、試写会で見たのですが、あの映画の魅力は、先の見えないストーリー展開と、独特で不思議な町の雰囲気かなと思います。この不思議な町は、どこかに参考にした場所があると言われてはいますが、ご存知ですか。この会場からは、台湾や群馬の温泉など色々な所が出てきたのですが、Googleで「千と千尋」「舞台」と検索してみると、台湾の九份(きゅうふん)という町が圧倒的に多くヒットしました。しかし、実は「多数」であること自体には、あまり意味はありません。学級会で「文化祭の出し物、何にしよう?」という際に多数決で決めるのは民主的でいいのですが、「事実かどうか」を知りたい時に「ネット上でこれだけ大多数の人が知っているからいいんじゃないかな」と思っていたらヤバイです。ひとつひとつこの記事を見てみると、ほとんどは個人のブログです。

「友達と一緒に台湾の九份に来た!」「まさに千と千尋の世界。イエーイ!」という無責任な個人の感想記事ばかりなんです。会社なり公的機関なりが、責任をもって言っている情報がひとつもありません。では、どうしてこの九份説が主流となっているのでしょうか。

大手旅行会社の台湾のパンフレットやガイドブックをめくってみると「あの」映画の舞台」などとぼ

かして書いてあって、「これ」というのは言わないんですね。「九份が舞台ならば、どうしてそれを載せないのかな?」といくつか探しても駄目でした。こんな時、どうしたらその情報にたどり着けるのでしょうか。(会場:「作った人に聞く」。なるほど、ここでいうところのスタジオジブリに尋ねれば良い。大正解です。

<信用できる情報・できない情報を見極める>

「インターネットって信用ならないよ」という話を散々してきたわけですが、インターネットには「信用できる情報」と「できない情報」があります。「どこの誰が言ったかがわかっている情報」は大いに使っています。

スタジオジブリの公式サイトに行くと、「作品の舞台はどこですか」というQ&Aコーナーがあります。「作品のうち、ここが舞台です、と公式に表明できる作品は多くありません。様々な地域が部分的に取り入れられている作品がほとんどです。」という前置きがあって、「ここが、舞台といえるもの」として地名が記されたのは『思い出ぼろぼろ』『海がきこえる』『平成狸合戦ぽんぽこ』『コクリコ坂から』の4作品だけでした。そして『千と千尋の神隠し』は「大いに参考にした場所」として「江戸東京たてもの園」と書いてありました。ここは、小金井公園の中にある明治・大正・昭和の建物を移築した都立のテーマパークです。公式サイトがこう言っているので実際に行ってみたら、確かに古い商店の街並みや作品の後半に出てくるような路面電車がいました。しかし、試しに台湾の九份に行ってみると、不思議にこっちのほうが『千と千尋感』が強い。怪しく曲がりくねった階段、夕暮れに灯る赤い提灯、古い建物。しまいには「湯婆婆(ゆばーば)の屋敷」という看板もあつたりして、さらにお土産屋さんにはカオナシのぬいぐるみも売っちゃっている。しかし私はこの時、既に「答え」を知っていたんですね。何がイエスで何がノーかを。

事実が何かを探るのに役に立つのが、図書館です。OPACで『千と千尋の神隠し』と検索してみると、映画のパンフレットと、『スタジオジブリ絵コンテ全集13』(徳間書店)、宮崎駿監督や作画監督へのインタビューやイメージボード・設定画セレクションが載った『文春ジブリ文庫12』(文藝春秋)などの本がいろいろ見つかりました。それらを紐解いてみると、愛媛県の道後温泉、目黒の雅叙園、有楽町のガード下歓楽街などを参考にしていました。台湾の九份については全く書かれていなかったんです。

「そんな梅澤が見つけないだけかもしれないし、否定の証言にならない。」と思う方もいると思うので、ここで決定的証拠をみなさんにお見せしたいと思います。私はつい図書館の資料では「九份説」を否定する証拠を見つけることはできなかったんです。ただそれは文献に限った話で、ここで視点をガラリと変えて「ネット上の、出所が明確なサイト」を探してみたところ、台湾の「TVBS 新聞網」というサイトに宮崎監督へのインタビュー動画が見つかり、本人が九份説を否定していました。さらに、「映画を作ると『モデルは自分のところだろう』と言う人は日本にもいっぱい居まして、トトロの時も家の近所を集めた材料で作ったんですが、はるか九州から『モデルはここだ』とか。同じような風景、いっぱいあるって事です」というエピソードまで、本人の口から聴くことができました⁷。肉声による証言という情報は、もしも本などの文献資料だけを探していたら、おそらくたどり着けなかったでしょう。

何かを証明する時には、「それが絶対的にイエスだ」という証拠を見つけるか、あるいは逆に「絶対的にノーだ」というところまでたどり着くかができれば、数学でいうところの「証明終わり:Q.E.D.」ってやつですね。この件は幸いにも、明確な結論が出ました。

ただ、お恥ずかしい話、私は九份説を信じ切っており、そうではないって事は、ただ偶然に知ったんです。実は4年前に、クロアチアのドブロブニクという街を旅しようとしたんです。アドリア海の港町でして、煉瓦色の屋根、青い海、斜面や山の上にある教会の塔など、中世そのままのたいへん美しい町です。ここに行くんだと人に言ったら、いろんな人が、「その町って、『魔女の宅急便』の町のモデルだよ」と教えてくれました。繋がりのない多数の人がそう言うなら、きっと本当なんだろうと思って、ある日 Facebook に、「この夏私は、ドブロブニクに行きます。この街は魔女の宅急便のモデルになった町です」と書こうとしたんですが、そこでアップロードボタンを押そうとした時、私は図書館司書なので、もう一人の自分が「ガシッ！」とその手を掴んで止めたんです。「日頃お前は、学生さんに『確かな情報に基づいて、ものを言わなきゃダメなんだよ』と偉そうに言っているのに、その程度の情報だけで大丈夫なのか」と、自分を問い詰めるわけです。「おっと、危ねえ！」と思って念のため探したら見つかったのがさっきの公式サイトで、そこで初めて台湾説が怪しいことに気付いたんです。その時まで私は「こんだけの人が言っているんだから、きっとそう

だろう」というだけの根拠で、自分の腹の底まで誤った情報が染みついていたんですね。

次の写真はどうでしょう。これは私が初めてリュックを背負ってイギリスのオックスフォード大学に行ったときの写真ですけど、20年以上前なので、ハリー・ポッターの映画どころか小説さえも書かれていないという時代です。クライスト・チャーチ・カレッジという大学があって、そこの食堂が美しくここも「ホグワーツ魔法学校の食堂のモデルになった」と言われています。ところが、Googleで「ハリー・ポッター 食堂」を検索してみると、またしても大量の個人ブログしか見つかりませんでした。さっきの例とは違って、どうやら本当っぽいのですが、どうしても決定的な証拠が見つからない。そこで私はハタと立ち止まって、「待てよ。ハリー・ポッター書いた人はイギリス人で、映画を作っているのも英語圏の人なのに、どうして発信元の人たちが親切に日本語（カタカナや漢字）で情報を発信してくれると自分は期待してるんだろう？」と気づきました。そこで「Harry Potter Hall」と検索ワードを英語に変えてみたら、一発で見つかったのが、このクライスト・チャーチ・カレッジのホームページです⁸。

日本語を使っている人は、世界70億人のうち1億人しかいないですよ。このテーマに限って言えば、公用語は英語じゃないですか。なのに、日本語で探していたんです。さらにいろいろ探すと「この食堂をモデルに、ロンドン郊外のスタジオにセットを作って撮影されました」とか、「それだけではつまらないので、歴代教授陣の写真を一枚だけ持って行って本当に使いました」などがわかり、ハーマイオニー達と色々調べたりする図書館のシーンは、オックスフォード大学のボドリアン図書館で撮影されていることがわかりました⁹。ここまで調べると、初めて「ここがモデルなんだなあ」と言えるということです。

ネット上に限らず、情報は「多数の人が言っているから真実だ」というわけではありません。そして、「向こうからやってくる情報」にも気をつけなければなりません。これは、2004年頃からよく友達の間などでシェアされていた「ハーバード大学の図書館では、朝の4時まで勉強している」という写真です。さらに、ハーバード大学図書館の壁には20の格言が掲げられている、との説明もある。たとえば夢について「今、あなたは夢のために学ぶことができれば、将来その夢を叶えることができる。今、あなたが眠って夢を見れば、それまでの話だ」のような素敵でカッコいいものです。当時この写真が、爆発的にシェアされました。でも、私には何だか美談すぎて胡

散臭く感じられました。そこで、さまざまな方法で証拠を探してみたのですが、確実に証明するならば、ハーバード中の図書館を全て見て回ってみて「20の格言が、どこにも掲げられていない」ことを証明しないとイケない。こんな時には、また英語の公式サイトが使えます。ハーバード大学図書館のQ&Aコーナーで、「図書館の壁に格言のリストがあるそうですが、どこに行けば見れるんですか？」という質問がきていて、「ありません。それは中国のネットで流行ったネタです」と親切に回答してくれていました¹⁰。このような、「どこの誰が言ったか明確な情報」を使えば、いちいち現地に行かなくても調べる方法がいくつもあるわけです。

＜「噂」の広がるメカニズム＞

ここで「なぜ、いいかげんな噂って広がるんだろう？」という疑問について考えたいと思います。熊本で地震が起きた直後、家族でおにぎり1個をシェアしていた時期の出来事です。「小学校で、肉100キロを無料で配布します」という情報がTwitterでものすごく拡散されました。これは根も葉もない嘘であったにもかかわらず、「これは、お腹が空いた現地の人に知らせてあげなきゃ！」という善意により、どんどん拡散されました。この小学校は、被災者やお年寄りの対応、毛布の調達など本来やらなきゃいけないことが山ほどあるのに、「本当に配るんですか？」という問い合わせに忙殺されてしまったという事件です。同じように、熊本地震の後に「ライオンが動物園から逃げたぞ」という情報がライオンが町角を闊歩している写真付きでアップされ、これも「危険だから、現地の人に伝えなければ」という善意によって拡散されてしまった。この元ネタをツイートした神奈川県の20代の男性は、逮捕されました。警察によると災害時にデマを流して業務妨害で逮捕されたのは全国初というケースです。20歳という年齢から想像すると、たぶん写真に一言コメントをつけて自分のTwitterにあげると、友達が「面白いね」「うまいね」といつくれる反応を楽しんでいた感覚じゃないかと思うんです。ただ、そのツイッターの公開先が全世界になっていたのが逮捕されてしまった。そこまでの悪気はなかったのかもしれませんが、大きな影響と迷惑を及ぼしてしまいました。

「こんな嘘の情報をネットに流すなんて、何のメリットもないじゃないか」と普通ならば思いますが、実は、場合によっては現実的なメリットがあるんです。たとえば去年の夏、『釣りバカ日誌』の俳優・西田敏行さんが「違法薬物を使ったぞ」「捕まった

ぞ」というデマが流れました。もちろん、全くの事実無根だったのですが、発信した40代から60代までの3人が書類送検されました。なんでこんなことをやるかという、「えっ！逮捕されたの？じゃあ、この記事を見てみなくっちゃ」と思った人は、クリックしてサイトを見に行きますよね。そこには広告が出ており、見に来た人数に応じて広告主からお金が支払われる仕組みです。人が飛びつくような内容の嘘ニュースを自分のサイトに載せることで、月50万円以上もの収入を得ていたわけです。DeNAがやっていた「WELQ」という医療情報サイトが閉鎖に追い込まれましたが、あれは、寄せ集めのいい加減な記事なのに、たとえば「肩こり」と検索した時に、治療院や医者が責任を持って発信しているサイトよりも上に検索結果が表示されるように工夫したものでした。

こういうことが起きるのは、ネットの発達した時代や、世代のせいだったりするかと、そうでもない。次の写真は、江戸東京博物館に所蔵されている警視庁の張り紙です。「注意。根拠のないことを言いふらすと、罪になります」とありますが、これは今から約100年前の関東大震災の時の張り紙です。災害時の混乱の中、「地震が再来するぞ」「囚人が檻から逃げたぞ」というデマを流した人達がいたわけです。この人たちが当時20歳だとして、生きていたら120歳近く。つまり「最近の若い者」がいい加減なデマを言うようになったのではなく、人間にはもともと時代に関係なく「パニックに乗じて人を驚かせたり困らせたりを喜ぶ人」がいて、しかも皮肉なことに善意の人たちの「なんとかしてあげなくちゃ！」という優しい気持ちによって広まってしまう習性があると考えられます。そこにネットやTwitterが拍車をかけているのが今の状態なのでしょう。

「皆が言っている」という言葉を、皆さん今まで使ったことがあるかもしれません。先生に「何でこんな事やったの？」と責められた時に「だってみんなやってるもん」のような考え方は、さすがに大学に入ったら卒業しないとまずいですよね。

大学では、台風が近づいたり大雪が近づいてくると、「明日、休講らしいぜ」という噂が流れることがあります。しかし、本当に休講にするなら大学は朝一番の鉄道運行状況などを見て、9時の1限が休講なら朝の6時までに大学の公式ホームページに載せ、さらに前日の夕方までに、「明日、休講にする場合はこういうふうに出します」と予告するような対応をします。公式サイトに休講と載っていて信じるのは問題ないですが、「友達のア君が休講だと言

ったから」という理由で休んで出席時数の下限を下回って単位を落とし、内定の決まっている会社に行けず、5年間の大学生活を過ごすことになったら嫌ですよね。そのために何が大事かといったら「どの誰がいつ発信した情報か」に気をつけてはつきり頼れる情報を使っていきましょうということです。

<今自分がやるべきことを知るために>

皆さんがこれからどんな仕事に就くか、どんな問題に対して解決策を見出していかなければいけないかわかりません。今までは歴史なら歴史、国語なら国語の枠組みの中で学んできたかもしれませんが、大学では科目の枠をとっばらった「無限の学び」に挑戦することになります。たとえば、北朝鮮問題の解決策が課題となった時に、「力で押さえ込めばいい」でもないし「お金に困ってるなら、経済援助をすればいい」という単純な話でもない。様々な角度から見ていかないといけない。「北朝鮮と韓国が南北にわかれたのには、どういう経緯があったんだろう?」「その背景に、アメリカやロシアはどのような立場で関わっていたんだろう?」と時間軸や視野を広げて考えてみると、問題の全貌が見えてきますよね。今まで「〇×」や「4択マークシート」などで答えを出してきたかもしれないですが、これからは自分の意見を言って、納得してもらって、行動して、というふうに答えを出していけないといけません。その時さっきみたいな宗教や歴史、経済のような情報の引き出しがあればあるほど幅広い問題に対して答えを出すことができます。今皆さんは「良い大学に入って、がんばって働くぞ〜!」という状態かもしれませんが、あなたの夢ってそれで終わりでしたっけ?そういうふうに立ち戻ってもらいたいですね。もし小学生の頃の夢として「俺は地球防衛軍に入って世界平和を目指すぞ!」と考えていたとします。中学生になると、そろそろ「地球防衛軍って、組織として実在しないじゃないか」と気づきます。その代わりに、世界の食糧危機と戦うNPOや、教育問題に取り組むユネスコなど様々な組織が実在する。それに気づいたら、「そもそも世界平和ってなんだろう?」と立ち止まって考えてみて欲しい。人によって「教育を受ける機会が行き届いてる」だったり、「飢えている人がいない」とか「争いが無い」とか色々な平和の形があって、「それに対して自分はどう貢献できるだろうか?」というふうに考えると、中学生ならば地球防衛軍の夢は捨てて、でも世界平和の夢だけは捨てないでいて、学びながら考え続けてほしい。さらに高校や大学では、「どうやら国連とかユネスコなどの機関で働くには、英

語くらいは出来ないといけないんだな」ということに薄々気づく。だんだん具体的に見えてきた自分の夢から「逆算」して、「中学時代や高校時代何やったらいいんだろう」、「大学の四年間で何をやったらいいんだろう」と気づき、「今の自分に何が足りないか」がわかると、それが学ぶ原動力となります。

<学術情報の流れを知る>

「じゃあ、どうやって学ぶの?」という話です。皆さんには、本の探し方は10秒くらいしか説明してません。その前に、「これまでに人類は情報をどういうふうにシェアしてきたのか」ということを話していきたいと思います。たとえば新しい発見や技術があったとして、「iPS細胞が発明されたぞ」といった時、皆さんはそれをネットやテレビのニュースで見ることになります。「自分の細胞を使って、万能化(初期化)した細胞が作れる」ことのすごさがわかっても、新聞やテレビの情報のレベルでは、「どうすれば細胞が初期化するか」まではわかりません。そこで、発見者の山中伸弥さんは論文を執筆して、細胞学や生物学のその道の権威たちが査読(チェック)して、「適切な理論と十分なデータに基づいて書かれているな」、「これなら我が雑誌(『Science』や『Nature』)に掲載してもいいな」と認められると、世界中の人が見る雑誌に載ります。印刷された雑誌の形態もあれば、お金を払った人だけが見られる電子版もあり、世界中で情報共有されます。そうやって研究テーマが世界中の人達に「ああだこうだ」と揉まれ、「これは大切だよな」「事実だよな」となって、基礎理論が本になります。

なので、皆さんが1年生の時は、まずは本から学ぶことが多くなります。それは世界中の人が語り合い尽くした、大切なエッセンスなのです。そこで基礎を学んだ後、もし「〇〇細胞学という専門分野にチャレンジしよう」といった時には、たとえば『Cell』という細胞学の専門誌で最先端の記事を読むようになります。世の中にはいろんな雑誌があって、私が理工学部就職してびっくりしたのは、『月刊廃棄物』や『月刊ねじの世界』という雑誌があったこと。あと『養豚界』や『月刊糖尿病』、さらにお坊さんが読む『月刊住職』という雑誌もあつたりします。『月刊住職』は、調べてみると日本中の17の大学が所蔵していて、たとえば龍谷大学、駒澤大学、大谷大学、花園大学。お坊さんを育成する大学には必要な情報なんですよ。今、お坊さん界も結構揺らいでいまして、「お坊さん便」って知っていますか。今まで戒名はお寺に頼んでつけてもらうものでしたが、「お坊さん便」は一律3万5千円払っただけで、

僧侶の資格を持った方がお経をあげに来て、戒名をつけくれる。それを Amazon 感覚でやれるんですよ。一律料金なので安心感がありますが、お寺の業界からしてみるとこれは激震、黒船案件なんですね。そういう一般の人がまず考えないような業界の最新情報が得られるのが、専門雑誌です。

皆さんが、将来プロフェッショナルと呼ばれる職業についた時は、おそらくコンビニや書店では一度も見たこともない専門的な情報源をもとに、自分の仕事の意思決定をしていくことになります。そのための準備として、本で幅広く学び、最先端のことを雑誌で学ぶのです。そういった情報を集めて、大学や各地で研究が進んで、次の技術につながります。

<学術情報の循環>

今日午前の最後に、次の技術につながる循環の話をしたと思います。理系の話をベースにしますが、人文でも社会でも基本は同じです。このサイクルの中で嘘をつくと、とんでもないことになります。たとえば、STAP 細胞の実験結果や実験データに嘘があったことなどについて。最初、『Nature』という雑誌に投稿したら、査読で落ちたんです。「こんなバカげた論文は載せられませんよ」と。その時、小保方さんに世界的権威の方が味方について、書き直し後に載っちゃったんですよ。そして脚光を浴び、後でデータの不備が指摘されて、論文の取り下げになった訳ですが、何百年も続いてきた循環の中で一人の人が途中で嘘をついちゃうと台無しになってしまいます。もっと前には韓国ソウル大学の教授が万能細胞の研究で嘘をついて大ごとになりました。山中伸弥先生だって、ゼロから iPS 細胞を開発したわけではありません。実は 40 年も前にケンブリッジ大学のジョン・ガードン先生という方が両生類の細胞の初期化には成功していました。けれどそのあと 40 年、ヒトに応用することができなかった。山中先生はガードン先生はじめ世界中の研究論文を読み、どうすればこれがヒトに応用できるかというところからスタートして、ある 4 種の遺伝子を細胞に導入することによって初期化することを発見しました。ノーベル賞は山中先生が取ったと思われていますが、授賞式の舞台上に立ったのは山中先生だけではなく、ガードン先生と二人への授与でした。ガードン先生は、両生類の細胞初期化から 40 年後、自分がまだ存命のうちに若い日本の研究者がヒトに応用してくれたことによって、遡って自分もノーベル賞の受賞者になれました。ちなみにノーベル賞は、亡くなっていると授与されません。だから、山中先生の研究がもしも 10 年遅れていたら、ガードン先生は取れなかつ

たかもしれません。このように研究とは長い長いリレーのようなもので、過去のバトンを正しく次の世代へパスしていくことが、大事なんですよ。可能であれば、午後これの続きを少しした後、ワークショップに入りたいと思います。ちょうど 12 時になりましたので、昼休みの間に感想を書いてください。午前中はここまでです。ありがとうございました。

— 午後の部 講義の続き・ワークショップ —

3. 図書館活用・情報リテラシー教育の実践事例

(つづき)

<情報の 4 つの評価基準>

続きを少しやってから、ワークショップにいきたいと思います。まずは「情報の評価基準を持ちましょう」という話です。そのために 4 つ大事なことがあります。

1 つ目は「信頼性、客観性」。繰り返し強調しますが、「いつ、どこで、誰が言っている情報か、必ずたどれること」が大切です。

2 つ目に「網羅性、鮮度」です。私が中高生ぐらいの時には、わからないことがあったら、池袋が近くだったので芳林堂やジュンク堂、リブロなどに行って調べました。ただ本屋さんは図書館と違って商売の面もあるので、私がやっているような大学教育や図書館学、情報リテラシーのような本が全国どこでもたくさん置いてあるかという、そうでもないですよ。芥川賞をとった本を大量に平積みしたほうが儲けにつながるわけです。図書館は、たとえばその稲毛の公立図書館だったら、稲毛区民の一家に 1 冊必要ではないけれど、ここに置いておけば誰かが使うかもしれないということで、皆から集めた税金で網羅的に「誰かが使うかもしれない」ものを集める。これは学校図書館も大学図書館もそうです。例えば中央大学の図書館は、法学に関してはかなり網羅的ですが、美術に関する本は美大には敵わないし、医学に関する本は医大には敵いません。それぞれの図書館が得意分野を持っているということは、調べるときにどこにあたればいいのか、図書館によって違うのです。

3 つ目に費用対効果の話です。みなさんがこれまで買ってきた本は、文庫本なら 500~1,000 円、単行本なら 1,500~2,000 円くらいだと思います。けれど大学 4 年生あたりになってくると、たとえば「スロヴェニアの経済近世史」などの専門書籍ならば 5,000 円や 1 万円は普通にします。なぜなら、そんな分野の本を 1 万人も 10 万人も買うわけじゃないか

らです。新書になってくるとたとえば大ブレイクしている『応仁の乱』が千円以下で買えるのは、買う人がたくさんいるからです。これに対して図書館は「専門書でも、誰かが使うかもしれないから一冊は買っておこう」と判断し、高額な書籍も幅広く購入します。個人の財力では揃えられない「知のコレクション」を使えるのは、図書館を味方につける強みの一つです。

4つ目の「再生産性」が一番大事です。苦しいけども一つ一つのレポートに対して一生懸命一から調べて戦った経験というのは、その次に別のテーマが課せられた時に「ああいう資料があったけど今回使えるんじゃないかな」、「前回使えなかったけど、あの時のデータベースは使えるんじゃないかな」という「情報の引き出し」が自分の中に染み込んでいきますので、全く無駄な経験にはならないんですね。それを何度も繰り返して最後卒論にチャレンジして、本気でやった人が、就職活動など様々な場面で臨機応変に「簡単には手に入らない情報」に基づいて意見を述べ、自分の価値を輝かせることができる。これこそが「知識の体系化」です。

その場その場で直面した課題に対し、安直にググって切り抜けてばかりいると、木に例えると葉っぱが生えては落ちるばかりで、幹が育ちません。自分の中にどっしりとした幹が育っていれば、自分の中から毎年多くの葉や花や実をつけることができます。次に雨が降った（新たな課題や知識に出逢った）ときに自分の滋養にしていけるような大樹を、自分の中で育てるイメージをもってください。

<なにペディアを使うか>

いよいよ調べ方の話です。皆さんは、日ごろわからないことがあったときに「なにペディア」を使っていますか？ いまフフと笑いましたね。Wikipedia、使っちゃいますよね。確かに、特定分野では通常の百科事典では適わないほどの網羅性と緻密さが強みであり、必ずしも全ての記事が信頼できないわけでもありません。さらに、たとえば地域について地元の方々などが図書館と連携しつつ確かな情報を出典つきで充実させる「Wikipediaタウン」という取り組みなどが生まれております。

しかし、ご存じのように誰でも自由に編集ができます。その時に見た情報は、たまたま最後に誰かが編集した情報です。例えば、学歴詐称事件で騒がれたコメンテーターがいましたが、その当時のWikipedia記事には「ハーバード大学ビジネススクール修了 (MBA)」と載っていました（過去の編

集履歴を見ることができます）。その情報に対して責任を取らない立場だったら「そうなんだ〜」で済みますが、当時のニュース番組のプロデューサーの場合はどうでしょうか。この記事を見たとは限りませんが、そのような「根っこのない情報」に基づいて自分の番組に出る出演者を選び、スポンサーからもらったお金でギャラを払って公共の電波に乗せてしまい、さらに誤ったプロフィールを拡散・定着させていたならば、さっきの「プロフェッショナルの基準」に照らしたら、プロの仕事とはとてもいえないわけです。

何かを検索すると、ほぼ必ず上位にWikipediaが表示されますが、私はそこを飛び越えてしまい、発信元の確かな情報だけを見るように心がけています。もし自分の仕事で何かあっても「Wikipediaに載っていました」という言い訳は使えないことに気づいたからです。

こういう話をするとう「梅澤さんって図書館が大好きで、ネットが嫌いなんです」とたまに言われますが、とんでもありません。私はネットの超ヘビーユーザーです。ただ、使うときには自分の中にある基準を大切にしています。さて、「それじゃ一体、何ペディアを使えばいいの?」という話に進みます。

<百科事典を使うメリット>

図書館に行くと『ブリタニカ国際大百科事典』などが並んでいますよね。全30巻でだいたい28万円。出版社が一つの百科事典を作るには、億単位のお金がかかります。一個一個の項目についてその道のプロに頼んで第一人者に記事書いてもらうので、それだけの対価が要るのです。先日話しに行った小学校に、1974年のブリタニカがありました。その当時の知識としては、もちろん最先端。しっかりとした責任と信頼性ある知識ですが、「どこで、誰が何を言っているか」は言えても、「いつ」に着目すると、40年も昔の情報に基づいてこれからの政策やビジネス戦略を立てることはできません。ロシアはソビエト連邦になっているし、当時は無かった国家である東ティモールも載っていません。そうすると、ブリタニカのような信頼性・専門性があり、Wikipediaのように「新陳代謝」をする両方の特性を持ち合わせた情報源があればいいと思いますよね。そこで、たとえば『ジャパンナレッジ (Japan Knowledge) 』があります¹¹。これは有料のデータベースですが、個人だと月々2千円弱、公共や大学の図書館だと、契約しているために来館者が使える所も多いです。

一つの情報というのは、その人の立場から発せられています。たとえば「TPPについてどう思います

か？」と訊かれた場合、もしも私の出身が、歴代お米をつくっている農家だとしたら、カリフォルニアやアジアから安いお米が入ってきたら嫌だなと思うので「TPP がいかに愚策か、レポートで熱弁をふるおう」とするかもしれない。しかし、その時点で私の視点はすでに歪んでいて、中立的ではないわけです。一方、工業都市の名古屋では「TPP には大賛成。日本の車を世界に売ったら、経済が潤うよ」という意見の人も大勢いる。色んな立場と切り口で考える人達がいるから、TPP ひとつとっても一筋縄でいかない。そこで『ジャパンナレッジ』で検索してみると、たとえば『イミダス』であったり、『日本大百科全書 (ニッポニカ)』であったり、様々な切り口で何十も辞書、事典を串刺しで検索してくれます。TPP ひとつとっても 47 くらい項目が出て、外交や歴史や貿易、法律、様々な分野の話があります。それを使ってさまざまな角度から集めた基礎情報を理解した上で、初めて本を探すステップに進むわけです。

「本を探す」という入口に立つまでに 1 時間以上も話をしていますが、事典を使うメリットは大きく二つあります。たとえば「地球」という記事を書くのでも、地質学者、天文学者などその道の最前線の人に監修してもらっています。間違ったときに責任を取らなければいけないので、まず信頼性が高いというのが一つの大きな利点。もう一つの大きなメリットとして、記事を見にいてパラパラと関係ないページをめくると、全く予測しなかったような面白い記事が多く見つかります。

<検索から始まる「知の冒険」>

物事の言葉の意味とその背景を踏まえてから、初めて本を探しにいけますが、皆さんひょっとしてこういう本の探し方をしていませんか。「検索システムに言葉を入れ、出てきた本の中で面白そうなタイトルの数字をメモって、本棚に行って手に取ってみた」。これだと、一冊の本しか出会えなくて、少しもったいないです。検索結果のデータ画面はゴールじゃなくて、そこを根っこにして広げていけるんですね。例えば Amazon を使ったことがある人ならわかるかと思いますが、ある本の著者名をクリックすると関連する本がどんどんヒットしますよね。同じように、図書館のデータにはクリックできるキーワードが与えられています。図書館員は、本が入ってきた時に「これは何について書かれた本なんだろう？」と考えてデータを入力するんですね。私が大学生の時 4 年間やっていた作業です。『ろくろ首の首はなぜ伸びるのか』という本には当然、まずはキーワー

ドとして「妖怪」と入れます。と同時にこの本は、怖い妖怪としてのろくろ首だけではなく、「本当に、ヒトの首はそんなに伸びるのか？」という生物学的な見地から書かれた本でもあったので「生物学」というキーワードも入っています。当然「妖怪」をクリックしたら他の妖怪の本リストがたくさん表示されますし、「生物学」をクリックしたら、自分が想像もしなかったような本がヒットする。「NDC 分類」という項目がありますが、これは「日本十進分類法」という、ジャンル別に細かく振られた番号のことで、まさに図書館の本の背表紙シールに書かれたあの数字で、このルールは北海道から沖縄の図書館まで基本的に同じなので、自分の興味を持っている分野について一直線に探していくことができます。検索結果画面の NDC 番号をクリックしたり、あるいは番号をコピーして再検索してみると、同じ番号に分類された多くの関連本が見つかります。NDC の考え方は、この世の森羅万象をまず 10 に区切って、例えば自然科学だったら 4 番とする。さらに、その中をまた 10 に区切って、44 は天文・宇宙、45 は地球・気象…というように、似た分野が隣り合うようなルールで図書館の本は分類されています。なので、皆さんがふらりと本棚を眺めた時にも、同じ分野の本が集まっていたり、隣接分野の本にスムーズに出逢えたりするわけです。

<色々なデータベースを使いこなす>

ここから先は私が日頃図書館を使う際の活用法です。蔵書検索システムでヒットする本は、あくまでも一つの館や一つの市が持っている本ですよ。ただ日本にはたくさん本が流通しています。となると「日本で今、この分野ではどんな本が存在するのか」が網羅的にわかるとよいですよ。そこで、「WebCat Plus」というデータベースがあります¹²。これは江戸時代から今日に至るまで日本に流通している本が、ほぼ全て検索できます。さっきの「シャッター商店街」で検索すると、それに関する本が数百から数千ヒットします。でも、タイトルに「シャッター商店街」が入る本が百も千もあるわけじゃないですよ。これには「連想検索」という機能が働いていて、たとえば「マーケティング」や「消費者行動論」、「地域活性」など隣接するキーワードを、今風に言うと「付度 (そんたく)」して探してくれています。実験で、ここに「ドラえもん」と入れてみると、関連キーワードがでてきて、「あなたは、『のび太』や『ジャイアン』や『スネ夫』についても研究してるんじゃないですか？」と、連想キーワードを使いながら探してくれます。だから「ドラえもん」

で入力すると、なんと 3900 もの本がヒットします。中には、たとえば「漫画の描き方」も入っていて、3900 では多いなあとと思ったら、刊行年で絞り込んだり、「このキーワードは入れるけど、こっちは入れない」など細かく指定すれば、数十冊くらいに絞り込めます。その中には、きっと自分の近隣の図書館では見たこともないような本もヒットします。「自分が所属している図書館にない本がヒットしてしまうのがない」と思うかもしれませんが、その時は、民間のデータベース「カーリル」¹³を使うと、「〇〇図書館にこの本があって、いま本棚にあるか、あるいは貸し出し中か」まで教えてくれます。多くの公共図書館では、利用者 ID とパスワードを持っていればここで予約までかけられます。私は平日にスマホを使って面白そうな本を「WebCat Plus」で探し、住んでいる市にあれば予約します。週末に図書館に行ったら、毎週 3~4 冊が常に届いている、という状態です。一週間で 3~4 冊読むのは難しいですよ。なので、つまらないと感じた本は途中でスッパリ読むのをやめます。お金を払ってないので、痛くも痒くもありません。つまらない本は、タイトルと内容が合っていないか、現在の自分のレベルに合わない本（あまりにも簡単すぎるか、その逆か）です。そうしていると、無理しなくても「自分にとって意義のある本」に年間 150~200 冊くらい目が通せるので、さっきの「知識の根っこ」というのがドンドン広がっていきます。これは、たまたま嬉しき感覚です。

<頼りになる新聞>

ここまで本の探し方を見てきましたが、新聞も非常に頼りになる情報源です。毎日届く最新号や、図書館に一定期間分あるバックナンバーだけでなく、もっと過去の記事をキーワード一発で探せるデータベースもあります。個人だと有料ですが、大学や公共図書館が契約していれば、その利用者は無料で使えます。日本経済新聞だったら『日経テレコン』、読売だったら『ヨミダス』など、それぞれの名前がついています。たとえば朝日だったら『聞蔵』をあたってみて下さい。これは『週刊朝日』や『アエラ』も収録していて、明治時代から検索できます。自分の生まれた日の新聞を読むこともできます。

時には『小学生新聞』もおすすめです。というのは、大隅良典さんがノーベル賞を取ったとき、私はニュース番組のゲスト解説者の話を聞いても「オートファジー」の意味がさっぱりわからなかったんです。解説に呼ばれるような専門家は「俺だって、この分野は詳しいんだぞ」という思い入れからか、ついつい難しい用語を並べちゃうんですよね。でも小

学生新聞は、「子どもでもわかる言葉で説明できないと存在意義がない」ので、「オートファジーは、要するにこういうものなんだよ」と、どこまでもわかりやすく掘り下げて、しかも平易な言葉で教えてくれるんですね。「難しい概念を簡単に説明する」のは、とても難しいことです（逆は簡単ですが）。これには博識さだけじゃなく、「わからない人の気持ちを理解する力」も必要なので、記者には頭が下がります。小学生新聞が物足りなく感じたら、中高生新聞や大人の新聞が面白く感じるようになるはずですよ。

ただ注意しなきゃならないのは、新聞はお互いに競争していますので、「他の新聞にこの記事が載せられる前に」と、取材不足の状態載せてしまい、後で謝罪するような事例が時々起こります。

また、特に安全保障などの政治的な記事は、各紙で捉え方や伝え方が全く異なりますので、注意して読み比べることが必要です。

<「ファクトチェック」とは？>

ちょっと前の地方創生担当大臣が、地方創生（観光促進）に関する質疑で、「一番のがんは文化芸員だ。観光マインドが全く無く、一掃しないとだめだ」などの発言をしました。さらに大英博物館（ロンドン）において「観光マインドがない学芸員は全部くび」になったと述べましたが、この発言について大英博物館は「明らかな事実誤認」と言っています¹⁴。担当している政策の判断で、誤った情報や、自分にとって都合のいい思い込みを論拠として語ることは、図書館司書の立場から見ると余りにも“ダサい”ですよ。ちょっと調べれば、誰にでも嘘だとわかることですから。

最近アメリカでは、トランプ大統領やホワイトハウスのスパイサー報道官の発言に関し、真偽が疑わしいことがあまりにも多いため、ニュース番組でもしも間違ったことを言ったら、即座に「今のは事実と違います！」というテロップ（文字情報）をすぐ入れる「Chyron（カイロン）」というシステムが生まれました¹⁵。強い力を持つ権力者を監視するジャーナリズムの役割はすごく大事です。政権側の発信する情報を単に流すだけでは、それを見た人は全てが事実と認識してしまいます。たとえばスパイサー報道官が「ヒトラーでさえ、化学兵器を使わなかった」と言いましたが、実際には使っています。それを知っている人だったら、瞬時にテロップを入れられるわけで、今テレビも変わってきました。

日本においても「ファクトチェック」という言葉が新聞などのメディアで使われるようになってきま

した。先ほどの例のように、「大臣がこう言ったけど、それって本当かな？」という視点で調べ尽くし、過去にさかのぼって発言をチェックし、常に見張り続けている。もともと報道機関の役割は、単に「伝える」だけではありませんでしたが、こういった瞬時の対応力や調査力を活かして専門性を発揮することがますます期待されます。

<調べごとのプロ・図書館司書の力を使う>

いよいよ図書館の出番ですが、「情報・資料がどのように組織化されているか」に精通した、経験ある図書館司書は「調べごとのプロフェッショナル」として頼れる存在であることは、もっとアピールすべきだと考えます。たとえば、夏目漱石の弟子が英語の翻訳に困っていて、「先生。“I LOVE YOU”は日本語で何と云えばいいですか？『私はあなたを愛しています』でいいですか。」と聞いたら、漱石先生は「いやいや。日本人は、そんなこと歯が浮くようなセリフは言えないよ。空を見上げて『月がとてもきれいですね』とでも言えば、十分伝わるよ」と言ったという素敵エピソードを聞いたことある人、手を挙げてみてください（多くの挙手）。そうですよね、私も聞いたことがあります。ところが、本気で調べてみると、不思議なことに昭和の後半になってから自然発生的に出てきています。もしもそれが漱石本人や弟子の随筆なり日記なりで残されていたならば、後世の文献にも「どこに書かれていた」という引用表記が出るべきところ、そういう道しるべが示されずに突然生まれてるんですよ。さっきの宮崎駿さんのインタビューみたいに、漱石自身が「言っただけよ、そんなこと」と証言してくれれば明確ですが、それは叶いません。なので「100%正しくない」とは言えそうにありませんが、もしも図書館に相談したら、もっと別の切り口が見つかるかも知れません。ただし近所の図書館員がこの分野を得意とはしてはいないことも多い。そんな時には、国会図書館の「レファレンス協同データベース」が助けになります¹⁶。「様々な質問に対して、全国の図書館員がこういう情報源を使って、ここまで調べましたよ」という膨大な事例を紹介しています。ここに「夏目漱石・I LOVE YOU」と入れて検索すれば、実際の図書館への質問に対し「これだけの文献情報にあたって、ここまで調べた、だけれど見つからない」とわかりました¹⁷。私なりに徹底的に調べたつもりでしたが、手にしていなかった文献も挙げられていました。同じ図書館司書でも、調査の切り口の違いで未知の情報にたどり着くことができました。

逆に、私が調べたプロセスでは、ここに載っていない新聞記事などの情報もありました。たとえば脳科学者の茂木健一郎さんがこのエピソードについて『読売新聞』に書いています¹⁸。しかし「新聞に載っているから」とか、「有名な学者が書いているから」漱石が言った論拠になるかという、そうではない。なぜなら茂木さんの専門は日本文学ではなく、また新聞記事とは言えども随筆的なコラムで「～だったそうである」という紹介ですから、論文のように学術的責任は追及できません。このように、情報源は用途によって選択する必要があります。もしも国文学科の卒業論文というレベルになると、この記事を論拠として事実として書いたらアウトかもしれません。

<「数字」は、根拠の強い味方>

ここまで本や雑誌、新聞記事などの「文献情報」を扱ってきました。次は、自分の意見を伝える時にとっても頼りになるツールとなる「数字」の話です。私は高校の時に数学が大キライでしたが、ところが大人になってから統計学に出会って、ものすごく感動しました。

たとえば、今日のような「情報リテラシー教育」に関して、「最近、ますます大学図書館における重要性が高まっています」と私が言ったところで、「それは、あなた個人の意見でしょ？ どうして高まると言えるの？」となってしまう。そのときにたとえば総務省が作っている『e-stat』という統計データベースが強い味方になります¹⁹。政府の各省庁による「農作物の取れ高」とか「犯罪発生数」とか、いろんな統計情報を検索・ダウンロードできます。たとえば一つの家でパンやおそばやラーメンにどれだけお金を使っているか、それが都市の規模によってどう違うかなどが、無料で細かくわかるんですね。

ここに「情報リテラシー」と入れると、文部科学省による「学術情報基盤実態調査」がヒットしました。全国700以上ある大学に向けた文部科学省による調査なので、網羅性が高い。「情報リテラシー教育を重視している大学図書館」が、わずか10年の間に9%から67%まで上がっています。このデータを論拠とすれば、「近年ますます情報リテラシー教育が重視されています」ということが客観的に言えます。しかしグラフ化してみると一直線の伸びではないこともわかり、そうすると「なぜこの時期に急上昇しているのか」、「最近横ばいなのはなぜか」という疑問がわいてきます。ここに「研究の切り口」があるわけです。上がったときには、何か情報リテ

ラシーを後押しする国の政策や答申があったのかも
しれない。横ばいなのは、たとえば委託化が進んで
直接的には注力しづらくなったのかもしれない。
様々な仮説があり得ますが、少なくともこういう公
的な数値データを用いることによって、「あなた個
人の思い込みでしょ？」とは言われないはずです。

ただ気をつけてほしいのは、公正を心がけて図を
作ったり数字を使うということ。グラフで一番注目
してほしいところにあえて地味な色やマークを使っ
ているのはなぜかという、学術的にフェアじゃな
いからです。

こういう「難関校合格者数、驚異の増加率！」と
いう予備校の広告を見たことありませんか。この図
は私が作ったのですが、「ずるい」ところを指摘で
きますか。まず100、102、104と毎年2人ずつ増え
ているので増加の率は一定であり、本当は直線の矢
印を使うべきところ躍動的な曲線の矢印を使ってい
る。さらに棒グラフの始まりが98人からで、それ以
下は大幅にカットされています。そして、100人の
ところは収縮色が使われているのに対し、104は膨
張色を使っているの、同じ幅でも広がって見える。
さらに、棒に奥行きがあることによって3次元の広
がりを感じさせ、差を大きく見せることができます。
細かいところですが、100に対し104のフォントは
微妙に大きい。こういう微妙なズルをする人は、何
かしら後ろめたさがあるはず。情報の受け手とし
ては、そんな小手先の技を見破れる力が必要です
し、自分で図を描くときにも相手にフェアな事実の
みを伝えるようにしなければいけない。こういった
嘘を見破るには、「ツッコミ」の力がいるんですね。
数字や図だけではなく、本を読む時にも、常に「ホ
ンマかいな？」という視点を持ち続けて、ものを見
ることが大切です。これが、批判的読解（クリティ
カル・リーディング）というものです。

<論文の決まり・引用のルール>

最後に、レポート・論文のきまりについて。「無
断引用」と騒がれる事件がありましたが、この言葉
には誤解が多いようです。「他の人の書いたもの」
を読んで参考にし、自分の考えを付加して発信す
ること自体は問題ありません。ただし、引用した箇所
と出典を示すことがルールとなっています。

さっきの山中伸弥先生は、ジョン・ガードン先生
の両生類の細胞初期化を、ヒト細胞に応用しました。
過去の研究成果を踏まえないと、40年前の状態から
始めないといけません。このことは「巨人の肩の上
に立つ」と例えられますが、「過去の蓄積された膨
大な知識」という巨人の肩の上に立って世の中を見

渡せば、はるか遠くを眺めることができ、足もとから
始める必要はないわけです。小保方さんの事件以
降、「無断引用は駄目」とばかり言われますが、論
文は本来、無断で引用するものです。つまりガード
ン先生の論文を自分の論文に引用したいなら、「こ
こからここはガードンさんの論文からもってきたも
のですよ」としっかり表記して、「読んだ人が後か
ら道をたどれるようにすること」を踏まえていれば、
全然かまわないんです。もちろんお二人は旧知です
から、e-mailで「引用させてください」「いいよ」
とやりとりができるかもしれませんが、別にやら
ないでもいい。これは学術における世界的なルール
で、たとえばアインシュタインの論文からの引用し
たい場合、本人の許諾を取ることは不可能だからで
す。むしろ執筆後にたくさんの人に引用してもらえ
ることが、その論文の価値を高めます。「無断引用」
は、「書いた人に対して断りを入れなくてはいいけ
ない」のではなく、「自分の論文を読む読者に対して、
無断ではいけない」わけです。

論文の骨組み作りとしては、集まった情報を基に、
まず研究すべきテーマの背景と現状、次に何が問題
なのか、何故そうなっているのかという原因、その
解決策を立てるために必要なデータ、ここまでの集
めた情報を駆使して分析してみる。どうすれば解決
できるのかと考察し、さらに提言に落とし込む。最
後に、この論文では解決できなかった今後の課題で
すね。たとえばiPS細胞は見つかったけれども、臨
床に応用するにはこんな課題が残っている、と示す。

これは、去年までに同じ「アカデミック・スキル
ズ」を履修した、みなさんの先輩たちが取り組んだ
課題の一覧です。共通テーマは「どうすれば、もっ
と良い大学になるか」でした。ある先輩は「留学生
が少ないから、もっと来てくれないかな？」という
着想から、いろいろ調べ始めました。ところが、さ
っきの統計情報データベースで調べてみると、そも
そもこの大学が礎とする教育学分野に関しては、理
工系などに比べると日本に学びにくる留学生はとて
も少ないことが分かりました。教員の免許制度が国
によって違うことも理由のようです。そこで落ちて
いて考えてみると、本質的に自分が求めているのは
「留学生が増えること」ではなく、「学内にいな
がらも、多くの海外の人と接点を持つこと」だったと
気づきました。そこで先進事例を調べるため新聞デ
ータベースをあたってみると、奈良県的女子大学が
自治体と提携し、英語や歴史を学んで海外の人を案
内するボランティア活動の事例を見つけました。案
内しながら自分もたくさんの人と英語を使う経験を
積み、相手にも喜んでもらえる取り組みです。ちょ

うどその年に都留文科大学のすぐ近くの富士山が世界遺産になって、富士山駅が観光客でごった返していましたので、自分たちがキャンパスの外に出て、案内役を買って出たらどうか、そのためには、自治体とどのように連携すれば良いか、というテーマに発展していきました。

他にも、たとえば「大学がゆるキャラを作るべきか」という問いを立てた先輩もいました。多くの大学がイメージキャラクターを作っており、例えば学生によるコンテストなどをやったら盛り上がるだろうけれど、先行事例を紐解いてみると、ある市のキャラにツイッターをやらせてみたら政治的に大きく偏った発言をして批判が集まり、閉鎖になったというケースなどを見つけ、メリットとデメリットを比較分析してみる研究もありました。あとは「学内禁煙への道」というテーマで探求してみたら、せっかく完全禁煙化した他の大学においてキャンパス外での路上喫煙が近隣地域の問題になってしまったなど意外な落とし穴に気付いたり。このように、ある問題意識を持って情報収集をしているうちに、自分が考えていた解決法の限界や、全く違った切り口からのより良い方策に気づく、という多くの探究上のドラマがあり、指導していてワクワクしました。

これがその授業評価アンケートです。「大学生として情報収集するときに役立つ」という回答は100%だったのですが、「もっと準備する時間が欲しかった」という意見が多いなど、教えるほうも教わるほうも、やってみて気づく点が多かったです。

＜世間の興味・関心の動向を調べる＞

「世間の人々が、何に対して、いつ頃、どれくらい興味を持つのか」を調べる情報ツールとして「Googleトレンド」があります²⁰。ここでみなさんにクイズです。毎年8月下旬になると検索する人が急激に増えて、9月1日になると誰も探さなくなるのは、何というキーワードだと思いますか？

それは「自由研究」です。「Googleトレンド」で調べてみると、毎年見事なほど同じような折れ線グラフを描いており、夏休みの終わりに駆け込みでやっつける子供たち(や家族)の苦悩が見えてきます。それでは、このようなニーズの動きが見えたならば図書館としてどう対応すればいいかという、たとえば7月の下旬か8月の上旬ぐらいに「自由研究テーマの探し方・書くための情報の集め方」について講習会を企画すれば、大いに喜んでもらえそうです。

自由研究や読書感想文が悩みの種となっている子供たちは昔から多くて、現代では何とメルカリで取り引きされている状態ですが²¹、たとえ自分でやっただとしても、義務的にイヤイヤ乗り切るだけならば、もはや「自由」でもなければ「研究」でもないですよ。そこで図書館が、知識の広がりによる無限の可能性についてヒントを示唆できれば、自由と研究のワクワク感を知るきっかけとなるはずですよ。

―― 午後の部 ワークショップ ――

＜「図書館だから」できる支援とは？＞

ここからワークショップに入ります。

4人1組の班を組んで「図書館利用ガイドンス」を根底からデザインし直すことにチャレンジしていただきます。学校図書館の舞台でもいいし、対象者は高校生に限らず、就職など将来に悩む若者でも良いです。

ただ、たとえば自由研究を支援するのであれば、「メルカリで買えるよ」は論外として、「デパートや通販で、自由研究のセットを売ってるよ」などという解決法を紹介するような講習じゃ、余りにもつまらないですよ。「図書館を味方に付けることによって、その自由研究の経験が将来の自分の生きる礎になる」ようなステップにしないと、図書館がやる意味がないじゃないですか。

なので、これからみなさんに班ごとに考えるガイドンスは、「図書館がやる意味」がとても大切です。「こう講習をやったらうけるんじゃないかな？」と思ったら、常に「それ、図書館がやる意味あるの？」という視点で考えてください。使うのは、図書館が持っている資料や情報だけでなくかまいません。公共のデータベースやWeb情報なども、信頼できるものであれば複合的に使ってください。たとえば今話題の「終活」をテーマにするならば、「地元の行政書士にサポートを頼んだら、お互いにメリットあるから安く引き受けてくれるんじゃない？」という発想もOKで、「楽しかった」だけでなく最後に「受講してよかった」と思ってもらえる内容を目指していただきたいと思います。やっぱり、その人が生きる上での次のステップ、解決策、ヒントにつながって、次回以降は自力でどんどんその力を育てていけるような講習をデザインして欲しいと思います。

それでは、違う地区の方と向き合うような形で4人のチームを作っていただきたいと思います。本来であれば全てのチーム全員が前に出て発表を行って

ほしいのですが、ちょっと時間がなさ過ぎますので、グループごとにペアになって、お互いに10分ずつ発表することを目標にしたいと思います。実際の利用者を対象にしたつもりで、高校生ならば高校生を相手に話すつもりでの発表をお願いします。模造紙やマジックペンを準備しましたので、使うグループは自由にどうぞ。もちろん、何も使わず言葉だけで話すのも手です。私は会場内を歩き回っていますので、なんでも聞いてください。はい、それでは開始です。

＜グループワーク・相互発表＞

この時間を記録として残すのは難しいですが、始めは各班でポツポツと小さく言葉を交わすような雰囲気だったところ、約40分という短時間でテーマを決めて中身まで構成するというゴールがあるため、だんだん互いに日頃の悩みを分かち合いつつアイデアを寄せ合い、ある人はキーワードの書き出し、ある人は発表プログラムへの落とし込み、ある人は模造紙に図を描き、と少しずつ役割分担が生まれてきました。当然パワーポイントもスクリーンも無く、綿密なシナリオも無い状態ながら、グループワーク後には隣の班との間で10分間ずつ、相互に模擬講習をおこないました。中には凝った寸劇風の班もあり、また聴き手側に自班のメンバーがサクラとして入って、質問と答えの対話式で構成されたものもありました。

はい。そろそろお時間でございます。宴もたけなわでございますが、皆さん、講習づくりの経験はいかがでしたか？日ごろ高校生に「静かに！」と言っても聞かないとお悩みかも知れませんが、今私が「話すよ」と言っても私語が止まりませんね。これは、大いに盛り上がった証拠だととらえてよろしいでしょうか？

午後は「アクティブ・ラーニング」を体験していただくことを目指しました。いくら学校側が「アクティブ」と言っても、やらされてる側は結構うんざりだったり、「こんな無理があるよ」とか、イベントそのものに対して色々言いたいことが出てくるものだという実感も経験して欲しかったんです。最初の班分けだって、実際には高校生もテキパキやってくれるわけじゃない。急にやれと言われても「えー、どうする？」みたいな、「えっ、自分が音頭とんなきゃいけないの？面倒くさいな」とか、そういうのもちょっと感じてほしかったんですね。ちょっと無理のある時間設定で、無理のあるゴール、しかもアナログの材料しか使えない条件下で、これだけのことができるんだったら、スライドやネットが使

えればもっともっと広がりのある講習ができるかなってことを、今みなさんの中のモヤモヤ感として持って欲しかったんですね。「実際の図書館や、資料を使わせてくれたら！」とか、「あと30分あれば！」とか、その渴望感とモヤモヤ感も、ぜひ学校の現場に持ち帰って欲しいと思います。

最初に事例を見せてしまうと発想のジャマになるので話してませんが、これは私が担当した「図書館情報技術論」の授業で、ある班が作った「英語を楽しもう」というテーマです。実際の小説や映画、アニメを例にとって「邦題と洋題は、こんな風に違うよ」という角度から、英語に親しんでもらうのが講習の狙いです。そのギャップを楽しむことによって「ちょっとこれ読んでみようかな」と思わせる取り組みです。たとえば、この英語の本の表紙に「I am a cat」と書いてあります。ある文学作品のタイトルですが、わかりますか。そうですね。「我が輩は猫である」です。でも、こんな直訳では「吾輩は猫である」感が台無しですよ。日本人にとって「吾輩」とは、めったに使わない古風で気取った珍しい言葉なのに、単に「I」としたことで、そんな要素が一切無くなっちゃう。欧米の人はこれで「吾輩は猫である」という言葉の世界観まで感じてくれてないだろうな、というギャップを感じて一緒に楽しいもうという「企み」なんですね。次は逆に英文タイトルの邦訳。たとえば「Frozen」。これはディズニー映画なんですけど、日本ではなんと「アナと雪の女王」と訳されました。「フローゼン」と言われてもわかりませんから、「こういう映画なんだよ」と想像してもらおうように変えてるんだと初めて知りました。次は100年ぐらい前の、日本の詩「Strong in the rain」です。そう、「雨ニモ負ケズ」です。こう訳すとは、全く予測できなかつたですね。次はどうでしょう。「What's mine is mine. What's yours is mine!」これは作品タイトルではなく、「ドラえもん」のある有名なキャラクターのワンフレーズの英訳です。そう、ジャイアンのお前の物はオレの物、オレの物はオレの物です。

こうした身近な例を楽しみながら、外国語で書かれた本への興味につなげたり、知らない国の話題に持っていったり「将来英語が使えたら、こんなに世界が広がるんだ」と気づかせたりと、「情報」と「講習」という固定観念に捕らわれない、大学生の発想力の自由さには驚かされました。

ちょうど3時になりました。今日は皆さん、午前と午後4時間という長時間にわたり、お疲れさまでした。私もグループワーク中に会場を巡って見て、いろんな質問や相談を受けながらアドバイスするこ

とで、たくさんの学びに恵まれ、非常に新しい空気と発見の1日になりました。

本当にみなさん長時間お疲れさまでした。ありがとうございました。(拍手)

—— 質疑応答 ——

Q1：浦安高校の久保と申します。今日は楽しいお話ありがとうございました。次期学習指導要領などで、新しいところでは小中に国語で図書館の利用が新設されました。高等学校でも新設されて入ってくるだろうというところで、大学と高校との図書館の接続を考えたとき、何かイメージがありましたら、そのあたりをもうちょっとお言葉を頂けたらと思います。

A1：質疑応答になるとシーンと静かになり手が挙がらないのが図書館員研修のセオリーですが、勇気を出して頂いて本当にありがとうございます。

高校でも大学でも「人生を長いスパンで見るときに役に立つような教育」を目指しています。その意味では「ゆとり教育」も同じ目標だったのですが、目的は良くても方法については丸投げされた現場が困っちゃうようなやり方だったし、浮いた時間を受験産業や塾産業に奪われちゃったりしていました。

「生きる力」の必要性に気づかせるには、「身に付かなかつたら、なぜヤバいのか」を実感させるのが一番だと思いますが、「伝えるべきこと」を淡々と序論から本論から結論という順番で過不足なく話せば人は聞いてくれるかと言ったら、寝てしまいますね。そちらの班で「“こうなるとマズい例”の話」を最初にしちゃうのが、ガイドランスでは効く」ってアドバイスをしましたね。「千と千尋」の例も、まずは私の失敗例として話しました。

先ほど、統計データを使って「リテラシー教育は重要視されてるんだ」と、言葉では説明できました。でも、たとえば学長や校長先生と一緒にエレベーターに乗っていて、もしも「梅澤君がよく言うリテラシーって、要するにどうして大学にとって必要なの？」と言われたら、5秒で答えなきゃいけないじゃないですか。その時には「先生。情報リテラシーの目的は、“NO MORE 小保方晴子”なんです」と言えば、「なるほど！それなら1年生から徹底しないと大学にとって危険だし、卒業生には徹底して身に付けさせなきゃな」というメッセージは、教育者や研究者であれば受け取ってくれるんですね。こういった「危機感」を、図書館以外の方や意思決定者

と共有することが、高大接続で何が必要かを考える上で大切です。

そちらの班が、司書教諭でもない学校司書でもない、図書委員でもない、普通のその他大勢の先生たちに、授業の準備だとかで図書館はこんなふうに使えますよ、という「教員に向けた図書館の利用ガイドランス」というのをデザインしてくれたんですね。学生がこれから生きていく上で、数学や世界史でいい点をとるだけじゃなくて、生きていくとこの先、今まで習った全ての科目が一つにつながっていくんだよ、すべての授業で学んだことを使って、自分の中で解決策にして闘っていかないといけないんだよ。そんな将来の準備のためには、やっぱり教科の先生を味方に巻き込んで、あらゆる科目と連動していくのが大事なのかなと思っています。

大学生には大学生向きの、高校生には高校生向きの、その都度の自分の目的や生き方、ちょっと先の将来にフィットした図書館の活用法というのをからめてあげる。「使った時の良さ」と使わなかった時の「危機感」、「あいつは使っていないのに、自分が使っているときの有利さ」というのは、全世代を超えて効くんだなということ、つくづく感じています。

模範的な解答はありませんが、自分が高校生だった時、あるいは大学に入るぞという世代だった時、どれほどの危機感やぼんやり感を持って生きてきたか、わが身を振り返ってみることも大切です。「あの頃の自分に、これ言ってくれれば嬉しかったのに～！！」と、教えている自分さえも悔しがれるような内容があれば、必ず意義のあるガイドランスになると思います。私はいつも、それを目標としています。

高大接続のキーワードとしての「生きる力」とは、「自分の頭で考え、実際に動いて解決できるようになりましょう」というの図書館を使う意味であり、全ての世代の根底なかなって思っています。

Q2：千城台高校の伊藤です。今日は長い間眠くならないような面白い話、ありがとうございました。私事ですが、高校に来る前に大学図書館司書をしていて、結構賢い子たちのはずなのに調べ方を全然知らなかったりします。たぶんそれは高校時代の図書館の使い方と大学生になってから図書館を使わなきゃいけない時のレベルがだいぶ違うということかなと、高校に来てから思うようになりました。梅澤さんが思う、高校図書館で高校生にやっておいてほしいこと、大学生になる前に聞いておいてほしいこと、あればお願いします。

A2: ありがとうございます。今日やった「アカデミック・スキルズ」の授業は、20人くらいの1年生を、ひとりで3日間預かるんですね。そうすると高校の頃から調べて人前で話す鍛錬を受けていた子と、課題研究とか卒業論文とかで挑んだことがある子と、そうでない子というのが混在しています。都留文科大は公立で、結構センター試験で高い点を取って入ってくる子たちです。真面目でコツコツする努力は得意だけど、出しゃばらないタイプが多めです。放っておいても目が覚めるようなプレゼンをやる子もいますが、さっきみたいに私が教室を歩き回って「どこでつまづいているかな」と聞かないと立ち往生しちゃう子もいます。多くの大学入試で課題研究や人前で発表する力が問われていない以上、全ての高校で指導しているわけではないんですね。逆に、妙にプレゼンテーションが上手くてついつい技術に走っちゃうような子の発表は、聞いていて面白いけどメッセージが伝わってこない場合も時々あります。「これだけは伝えたい！」という想いがある人の口から発せられる言葉と、ただプレゼンの技術だけを磨いてきた人の言葉は、全然違うということなんです。

もしも高校で、人に伝えてみよう、自分の言葉をもう一度磨いて文章に落としてみようという鍛錬をしてくださるのであれば、一律に課題を勝手に与えるのではなくて、自分の今悩んでいることとか、立ち止まっていること、将来やってみたいこととか、「自分ごと」として切実に考えられるテーマに挑ませることが「アクティブ」っていう以上は必要だと思うんです。

私は小学校の時、図書館を「使わされる」のが大嫌いだったんですね。なぜかというと読書感想文が強いられて、課題図書が与えられていたからです。私はその時「この本の感想としては、要するにこう言って欲しいんでしょ」と考え、「命は大切です。主人公のここがすごいです。私だったらこうたでしょう。この本から、こんなことを学びました」という“模範的な解答”を上手に書くのは得意だったので、実は賞とかも取っちゃったんです。でも内心はすごく嫌で「自分の好きな本を読みたいし、感じたことは自分が言いたきゃ好きに言うのに」と思っていました。もしも研究に挑戦させるならば、せめて初めての課題でそういう「研究アレルギー」になるような出し方は、しないであげてほしいです。

正直に言えば、私自身の学生時代は及第点だけを目指して「こう書きゃいいんでしょ」みたいな、小学校の応用でずっとやってきたようなものでした。大人になって、自分の意思で大学院に行き初めて、

「アメリカの図書館と比べたら、日本は世界に置いてかれちゃうよ。どうすればいいんだ？」と真剣に頭を使ってみたら、めちゃくちゃ面白かったんですね。体中からアドレナリンが湧き出るような感覚でした。知れば知るほど、日米の違いとかアメリカの図書館の歴史に興味を広がっていき、そんな探求の道の途中で、さっきのカーネギーさんのことを知ってちょっと涙腺がやられちゃったりとか、脱線や寄り道を含めていろんな経験をして、「調べるって、面白い！」と心底思えたり、「これって、自分しかやってない学びかも知れない」って経験をしたら、止まらなくなっちゃったんですね。

それを、皆さんがもしも高校生に経験させてあげられたら、この経験は大学生になろうが、高校を出て就職しようが、一生の宝になると思います。

Q3: 印旛明誠高校の大場と申します。今日はありがとうございました。1日楽しかったです。アクティブ・ラーニングと大学の入試制度について、ちょっと質問したいんですけど。

午前中にお話いただいたところを、私なりに申し訳ないなあと思いながら聞いていた部分なのですが、年々高校生が考えようとする力というのが、すごく落ちてきているなあというのを、現場で感じまして、図書館司書としていろいろ授業で図書館を使ってもらって、いろいろ手を尽くしているところなのですが、そのたびになかなか上手いいかない無力さを感じる毎日です。生徒が無反応というか、反応がなくてちょっと質問して目をそらしているとか全然返事が返ってこないの、見ると首を振ってるんですね。横に振ったり、縦に振ったりして意思表示していて、イエスなのかノーなのか、そこでわかる。全然話をしない、声が出ないというような生徒が増えてきているように思います。

そんな生徒なのに高校3年生になるとMARCH以上の学校に、指定校とかAOとかで入りたいという子も出てくるわけです。そこで、いろんな先生に小論文見てもらったり、面接をしてもらったり、それからもっと知識を入れた方がいいよとアドバイスされて図書館にやってきて、「先生、大学に入れるための本とかありますか？」とか、「面接で、こういう本読みました、って答えたら受かる本ありますか？」と結構直接的な質問でやってきます。結局は大学入試推薦制度を使って行って、受かったり受からなかったり様々ですが、アクティブ・ラーニング的な要素として、お話いただける範囲で、推薦という制度に大学側がどういう工夫というか、アクティブ・ラーニング的な要素取り入れた入試というか。推薦の

中にもそういった要素が入っているのかどうかというのを聞かせてもらいたいと思います。

A3: ありがとうございます。さっきのお茶の水大の入試は、ものすごく大きな転換点だと思っています。今おっしゃったように、ポジティブじゃない人でも、コツコツ問題集を解いて、過去問やったりやあ、4択問題ならば結構いい点を取れちゃうんですね、頑張っていれば、そのやり方で東大にも入れるかもしれない。

でもこれから先は、少し変わっていくわけですね。というのも、例えば英語も、今までだって学習指導要領では「授業で話したり書いたりさせてください」と言ってるんですけど、でも、ひとまずの目標である「センター試験」と「大学入試」が、リーディングや、良くてせいぜいリスニングの能力しか測っていないので、逆にいうと「本気で自分の言葉で表現できるようになるための鍛錬にたくさん時間を使っちゃると、入試上は不利になる」という場合さえあります。「問題集を解ける知識はあんなに学んだのに、自分の考えを言葉にして表現することはできない」という問題があるんじゃないかと思います。

アクティブ・ラーニングも、目標を明確にしないと、生徒も先生もお互いに「しぶしぶ感」と「やらされ感」でいっぱいになってくると思うんですね。アリの的にやっても、20歳、30歳となったときに、その経験が人生の血肉はなっていないはずです。

さっき、あちらの班で面白い話が出たのですが、就職とか面接とか2日前とかに「読んだ本のことを聞かれるので、何読めばいいんですか」と聞かれると。「2日で何を読んだらどうってもんでもないし、そんな付け焼き刃は、どうせバレちゃうぜ」という問題があって、それならば、毎年受けるそんな相談を「先輩の失敗談」としてまとめて伝え、「今のうちに、他の誰も読んでいないような面白い本に出逢おうよ!」というメッセージを図書館から早めに発せられればいい。名著を選び「正解」になりそうな感想文を書いたって、さっきの就職活動の例で言えば、100人中80人はそんなものを出す訳じゃないですか、それより自分が本気で「面白い!」と思える本を早く選んだ方が、熱く語れる訳ですね。

だから1番の近道は、早くに自分が「夢中になれる本=夢中になれる世界」を見つけちゃった方がいいわけです。熱く語れる本でもそうですし、もし面接のある2次試験だったら、「自分がこの学科で学んで、将来こういうことがやりたい」と真剣に語れるようになればいい。

意外と皆さんが見落としている情報として、大学のシラバスと、アドミッションポリシー（入学者受け入れ方針）、カリキュラムポリシー（教育課程方針）、ディプロマポリシー（卒業認定方針）という3つのポリシーがあります。例えば「うちの大学の何学部では、こういう人を育てます、そのために教育内容はこうなってます。だから入試ではこういう力を測ります」というのが、全ての大学と学部で公表することを義務付けられているんです。大学のほうは一生懸命考えて発信しているメッセージなのですが、そこを見て面接を受ける人と、見ないでA大学の法学部とB大学の経済学部の面接で同じ志望理由を言ってるような人とは、自ずと差がついてきます。なので、答えがはっきりYES/NO、白黒、ABCと答えられないような入試にチャレンジするならば、誰よりもまず相手は何を求めているかを知り、それに対して、目を輝かせて語れるものを自分の中にいち早く身につけるか、ということにかかっているのかなと思います。

あと、中高生の頃の時の恥ずかしい話をしますけど、私は6年近くも日記をつけていたんです。それを大学20歳とか25歳とかで読み返してみると赤面もので、中2から6年間たっても中2病って感じなんです。でも、さすがに中2よりも高2の方が文章ははるかに磨かれてきてるんです。大人になった自分が見ても「だんだん上手に、読みやすくなってきたなあ（でもこれ、明らかに村上春樹の影響受けてるなあ）」と、わずか数年でもやっぱり読ませる文章にはなってきたんです。やっぱり自分にとってのトレーニングだったんだな。あの頃「たくさん本を読んで新しいたくさん知識に出会いなさい」と言われていたけど、好きな作家の本ばかりずーっと没頭して読んでいて、それも意外と自分の血肉になってるんだなあと思いました。

今日、行きの電車の中で読んでいた外山滋比古さんの『知的文章術』という出たばかりの本の中に、「そういう掘り下げ方もある、1つの大好きな文章をひたすらひたすら読むことによって得るものもあるし、幅広く得るものもある」とあって、何もやらずにいたよりも、あるいは世間から求められるものだけを消化していたよりも、きっとはるかに自分の滋養にはなっていたんだと腑に落ちて、電車の中なのにちょっとウルツときてしまいました。

Q4: 市川東高校の松尾と申します。今日は本当にありがとうございました。うちの学校でも世界史の授業で自由にテーマを決めて調べるというグループ学習をやっているのですが、一番最初にテーマで引

っかかることが多くて。今回ワークショップを自分たちでやってみて、やっぱりテーマでひっかかったということがありまして。図書館の調べ方ガイダンスの時に、自分が興味を持っていることをテーマにすること。また、それに興味を持っているかどうかわかるには、基礎知識があるんだよという2つを伝えて、下調べからやるように言っています。けれどグループの中でもやっぱり興味がわかれている、なかなか決まらなかったり、半分以上興味がないとそっぽ向いちゃったグループもありました。共通のテーマを見つける、もしくは興味を持てるようなもっていきかたをするのに、言葉選びとか、スキルのようなものがあれば、教えていただければと。

A4：自分の中にある考えや意見を引き出せるようにするには、グループ内が安心して親しく語り合える場になっていることが大切です。

私は、小中高大学ずっとボーイスカウトのような地域の野外活動ボランティア（ジュニアリーダー）を続けていました。3～6年生の100人ぐらいを連れて行くんですけど、各学年が2人ずつぐらいの7～10人ぐらいの班をつくります。もちろん同じ学校同士とかの接点もないし、その日の朝に会った人メンバーが、親元を離れて3日間を一緒に過ごすんです。その時にやるのはゲームですね。最初は自分たちリーダーが全体が仲良くなるための交流ゲームで盛り上げますが、そのあと班ごとに「お互いがどれだけわかり合えるか」というゲームをやります。つまり、私たちの中にどれだけの共通点があるだろうということを、いっぱい集めた人が勝ちというふうにするんですね。そうするともうみんな夢中になって、右利きの人とかが手を挙げて、右利きがありならと、最初は二足歩行とか肺呼吸とかも出るんですけど、さすがに誰にでも共通点でポイント稼いでも馬鹿馬鹿しいとわかるので、「何が好き？」だったり、小学生でもだんだん具体的な方向に向かっていくんです、そうなるくと、その班の仲良くなっていく様子、全く違いますね。

さっきの「図書館情報技術論」でも、80人ぐらいを11班ぐらいに分けてグループワークをします。7～8人の班だと、何もやらない子はなるべく端っこの方に居たがります。その時も、同じようにゲームを使って共通点を探させてみると「1年生の時の授業で、結局あの後大親友になりました」みたいなことも生まれたりします。大学生だって、もちろん放っておいて「すぐテーマでました」「すごい充実してました」なんてなるわけないので、その時に少しでも、大人でも「共通点がある」というのは大きい

から、それこそ出身県が同じだったらメチャクチャ仲良くなりますよね。1個でも2個でも最初に見つけさせる時間をつくるというのは、大事なと思います。

<終わりに>

今日の「情報リテラシー」模擬講習については、京都大学図書館の勉強会に呼ばれた時の動画がアップされています。皆さん今日はお疲れかと思いますが、「もう一度聞きたい：という勇気のある方は、そちらをどうぞ御覧ください²²。

¹ 都留文科大学図書館サークル「Libropass」主催講演会「世界の図書館に行きたくなる話 第一部」
(2014年12月25日)

<https://www.youtube.com/watch?v=BfGdP4N3OfY>
「同・第二部」

<https://www.youtube.com/watch?v=SmevbSAMnSE>

² “Find a library”, Harvard University

<https://library.harvard.edu/find-library>

³ 新フンボルト入試（お茶の水女子大学）

<http://www.ao.ocha.ac.jp/ao/index.html>

⁴ 森 いつみ「今、大学図書館に求められている役割とは？：お茶の水女子大学における教育改革と入試改革の実践から見えてきたもの」2016年11月25日（2016年度私立大学図書館協会西地区部会東海地区協議会第2回研究会資料）

https://www.jstage.jst.go.jp/article/kanto/55/0/55_23/pdf

⁵ 「電子政府の総合窓口 e-gov・法令検索」（総務省行政管理局）

http://elaws.e-gov.go.jp/search/elawsSearch/elaws_search/lsg0100/

⁶ スタジオジブリ公式サイト「Q&A」コーナー

<http://www.ghibli.jp/qa/>

⁷ 「【FOCUS 新聞】TVBS 專訪宮崎駿 72 歲不老頑童 TVBS 新聞網」TVBS 新聞網

<https://news.tvbs.com.tw/life/503561>

⁸ “The Hall”, Christ Church, Oxford University

<http://www.chch.ox.ac.uk/visiting-christ-church/hall>

⁹ “Productions shot at the Bodleian”,

Bodleian Library, Oxford University

<https://www.bodleian.ox.ac.uk/bodley/about-us/filming/productions>

¹⁰ “Ask a Librarian service.”

Harvard College Library

<https://ask.library.harvard.edu/faq/81783>

¹¹ ジャパンナレッジ（株式会社ネットアドバンス）
<https://japanknowledge.com/>

12 Webcat Plus (国立情報学研究所)

<http://webcatplus.nii.ac.jp/>

13 「カーリル」(株式会社カーリル)

<https://calil.jp/>

14 「山本地方創生相 学芸員くび発言、大英博物館『事実誤認』」毎日新聞, 2017年4月20日

<https://mainichi.jp/articles/20170421/k00/00m/040/040000c>

15 クリス・リオッタ「ナチスでさえ化学兵器は使わなかった」レベルの大嘘を止める法: Networks Use Chyrons To Fact-Check Sean Spicer (Again)」

(Newsweek 日本版) 2017年4月12日(水)

<https://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2017/04/post-7391.php>

16 「レファレンス協同データベース」(国立国会図書館)

<http://crd.ndl.go.jp/reference/>

17 岐阜県図書館による回答「夏目漱石が『I love you』を『月が綺麗ですね』と訳したとされる根拠となる文献はないか。」2013年07月30日(国立国会図書館レファレンス協同データベース)

http://crd.ndl.go.jp/reference/detail?page=ref_view&id=1000160743

18 茂木健一郎「赤シャツー漱石自身を描いた分身大人になって気づき愕然」2007年3月18日 読売新聞

19 「e-stat 政府統計の窓口」(総務省統計局)

<https://www.e-stat.go.jp/>

20 Google トレンド

<https://trends.google.co.jp/trends/>

21 「自由研究 外注で代行業者、3年で売り上げ10倍」2017年8月31日 毎日新聞

<https://mainichi.jp/articles/20170901/k00/00m/040/077000c>

22 第195回 ku-librarians 勉強会「世界の“図書館をめぐる冒険”から考える、ライブラリアンによる教育・研究支援の高度化」2015年9月3日(京都大学図書館)

<https://youtu.be/32bPemxLkZY>